

トイ斯拉ー小伝

Dr. Rudolf Bolling Teusler

中村 徳吉 著



聖路加国際病院創設者

ルドルフ・ボリング・ トイスラー小伝



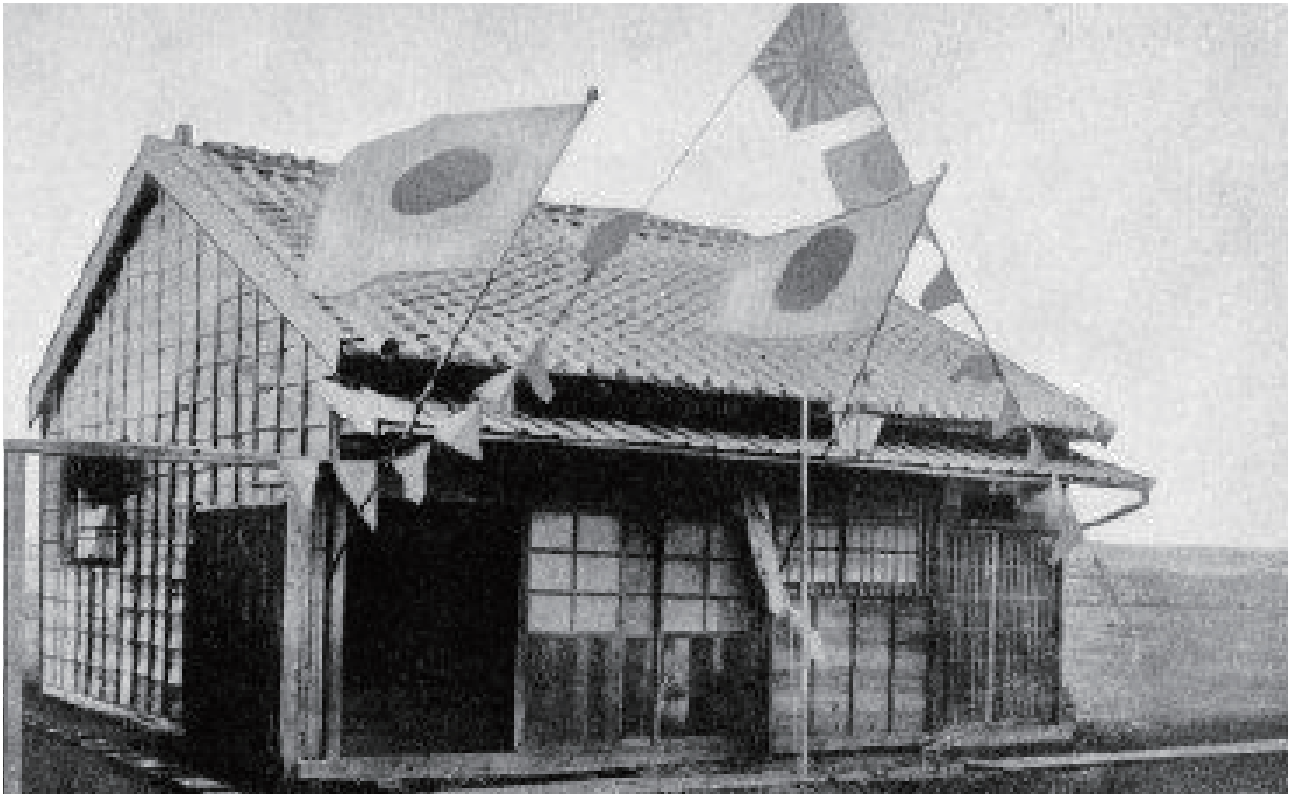
夫人のMary Steuart TeuslerとDr. Rudolf Bolling Teusler 1900年来日当初

Dr. Rudolf
Bolling Teusler
photographs



ネイティブアメリカン ポウハタン族酋長の娘ポカホントスの血を引くトイスラーの母親

St. Luke's Hospital 37 Tsukiji opened Feb.12 1901



1901年新佃西町2の15に開設した聖安得烈診療所（施療診療所）



1901年聖路加病院創設時の建物 京橋区明石町37番



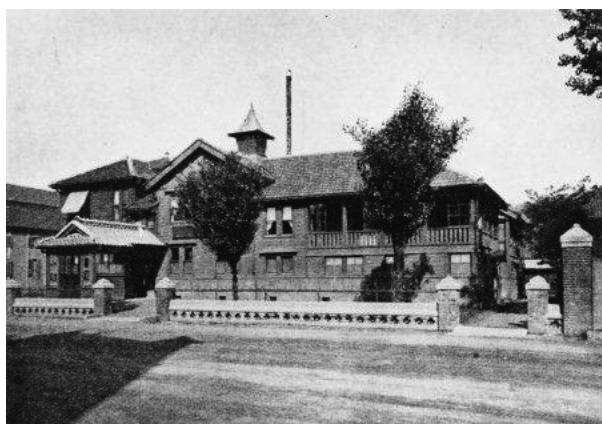
1902年頃 病院開設当初の全スタッフ



1904年頃 荒木いよ（初代婦長）によって始められた看護婦教育 看護学生と職員



1904年 初めてできた手術室での施術 スクリバ教授とトイスラー院長



1904年頃の聖路加病院



1914年 増築され4階建てとなった病院
(病床数70床、外来患者200人)



1910年代 トイスラー院長とスタッフ 前列は看護学生

1918年～1919年 米国赤十字社シベリア救護班



米国軍医大佐となったトイスラー
院長は米国赤十字社シベリア救
済事業の総指揮を任じられた



1918年 聖路加国際病院は総勢30余名の医師 看護婦 他のチームで米国赤
十字シベリア救護班としてウラジオストクに出向した



1921年頃の聖路加国際病院



1920年 聖路加国際病院附属高等看護婦学校開設
(写真は1923年頃 京橋区明石町1番)

1923年9月1日 関東大震災

“All gone but faith in God” 「信仰のほかすべては失われた」 マキム主教



震災前



震災後

天幕病院（1923.10～1924.6）

震災発生当時、帰米中の院長は米陸軍パーシング将軍に救援を依頼し、マニラの陸軍部隊から天幕病院と救援物資が届く。テントながら病床数225床、検査、レントゲン線検査、手術に対応可能な高機能病院であった。



待合室



外科外来



各部署のテント

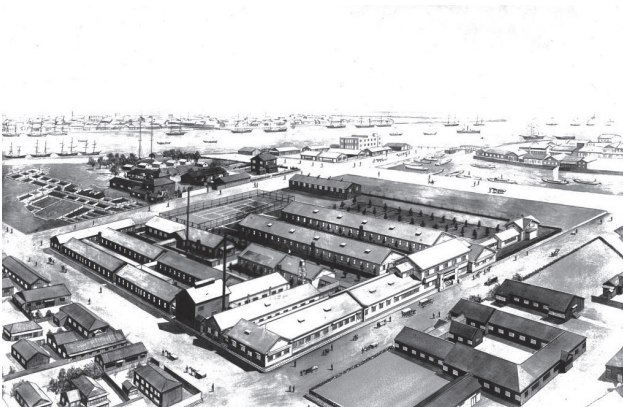
木造病院の再建



1924年（T13）春、完成間近の仮病院 震災後の天幕病院の後に建設された 右は記念撮影



1925年（T14）1月13日 1924春に建設された仮病院が火災により焼失した



新しい木造病院の完成予想図
(中央のブロックが現在の聖路加国際病院の建っている所)



1925年6月新しい木造病院の入口に立つ看護スタッフと看護学生

先進的医療への取り組み



1925年当時の外国人スタッフ



医療社会事業部（浅賀ふさ 前列左）



公衆衛生看護部設立時の訪問看護スタッフ



Well Baby Clinic

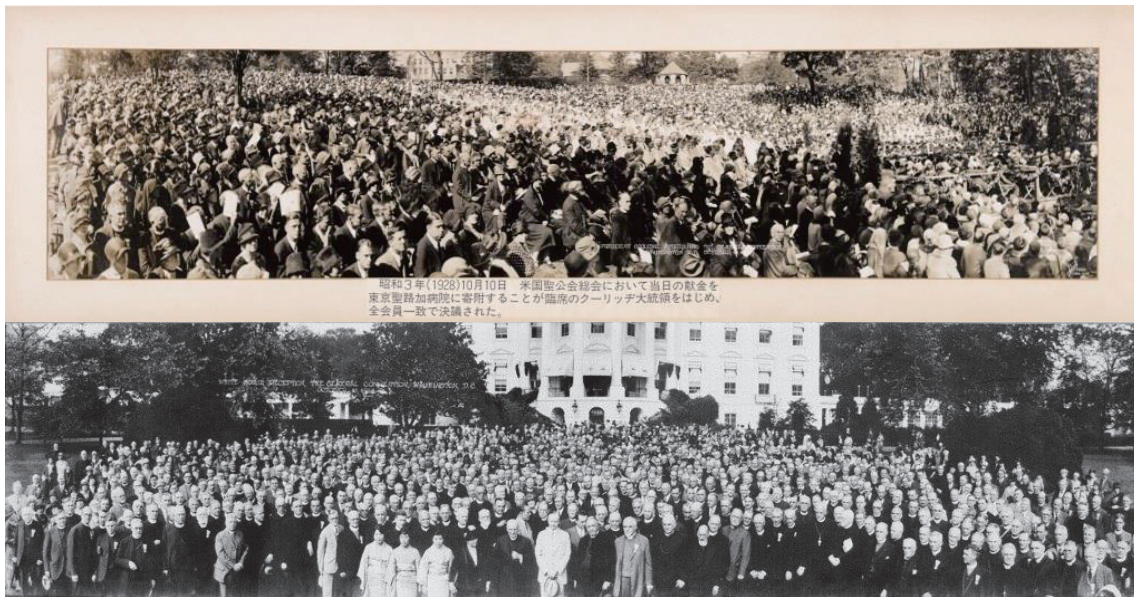


Well Baby Clinic

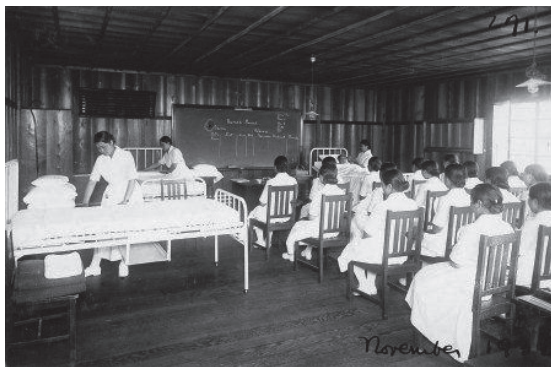


1926年 乳幼児健康相談所の開設

1928年 米国聖公会総会



リーダー人材育成の為の看護婦教育



1932年看護学 米国人教師による講義（ピーターズ）と演習（ヴァイディングー）

聖路加国際メディカルセンター建設へ

No. 150



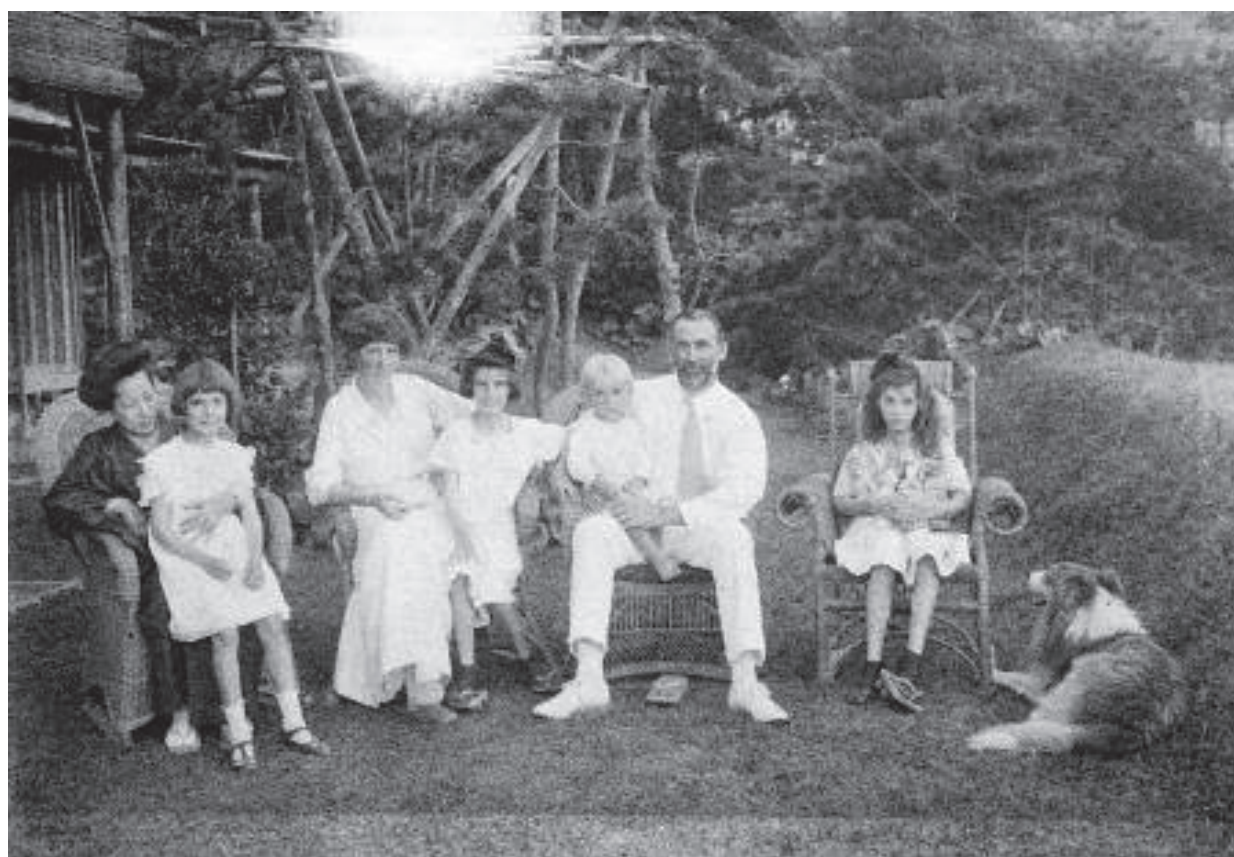
This is the St. Luke's International Hospital and College of Nursing and public recreation. There are seen in the plan the main building, the hospital, the college, the public recreation, the college of nursing and a public health department. The plan is shown in plan and elevation. The building will be the main building.

初期の設計から基礎工事まではアントニン・レイモンド スワガー フォイエルシュタインの3人のチェコスロバキア人設計士が担当 鉄骨が立ち上がった所でバーガミニに交代した



J. V. W. バーガミニ設計による完成予想図

1933年竣工した聖路加国際病院新館



トイスラーファミリーと荒木いよ

序 文

中村徳吉先生は一九一四年から聖路加病院に関係し、外科医として永く働き、五十年過ぎた今日も尚健在であって、この病院の発達を良く知って居られ、その創設者であるルドルフ・ボリング・トイスラーとも親しく交って、その業績をよくよく知って居られる。

病院創立後六十五年余過ぎた今日、この病院の発展を顧みて、いろいろの興味深い出来事を思い起こすのであるが、この病院を建設発展させた原動力であるトイスラー先生の人となりを知ることはわれわれ病院事業に関係するものには極めて有益なことである。中村徳吉先生はその古い記憶を辿って誤りのない記録をわたしどもに示して下さいるのは誠にありがたい。

昭和四十三年二月

聖路加国際病院
院長 橋本 寛敏

contents

photographs 序文：橋本寛敏

第 1 章

生い立ち

1. トイスラーの父 01
2. トイスラー誕生 02
3. トイスラー父の死 03

第 2 章

リッチモンド

1. 学生時代 05
2. キリスト教徒として 06
3. メリー・スチュアート・ウッドワードとの出会い 06
4. 母の死、そして開業医としてのトイスラー 07

第 3 章

決断

1. 日本行きを決めるまで 09
2. 北東京教区医療宣教師となる 10
(メディカル・ミSSIONナリー)

第 4 章

病院の揺籃時代 (はじまりの時期)

1. 東京到着 11
2. 築地での暮らし 11
3. 病院の萌芽期 13
4. 病院の発展のために 14
5. 国際人トイスラー 16

第 5 章

国際人 阪井徳太郎と トイスラーの活動・評価

1. 阪井徳太郎氏のこと 18
2. 日露戦争の勃発 18
3. 新病院建設まで 19
4. 御内帑金下賜 21
5. 従軍報道記者を志願したトイスラー 21
6. 病院を大きくするために 22
7. 日本アルプスを楽しむ 23
8. メヂカル・センターのビジョン 24
9. 無料奉仕に対する明治天皇からの褒状 25
10. 日米協会での協賛援助 26
11. 寄付に関する補足 26

第 6 章

シベリア

1. ロシアの情勢について	28
2. 米国赤十字社シベリア救護班	29
3. 基地病院（ベース・ホスピタル）	30
4. シベリアにわたる救護事業	31
5. 帰国	34
（追補 1）	35
（追補 2）	36

第 7 章

理想

1. 新病院の計画	37
2. 看護婦学校の設立へ	38
3. 新病院建設へ	39

第 8 章

関東大震災

1. 震災の記録	42
2. 震災当日の聖路加の様子	43
3. 震災後	44
4. 復興に向けて	45
5. トイスラー東京に帰る	46
6. 仮病院	47

第 9 章

聖路加 メヂカル・センター

1. メヂカル・センター構想	51
2. 聖路加女子専門学校	52
3. メヂカル・センター構想の実現	53
4. 新病院建設と公衆衛生事業の拡充への取り組み	55
5. 米国聖路加国際病院評議会	57
6. 病院の完成	59

第 10 章

逝去

.....	61
-------	----

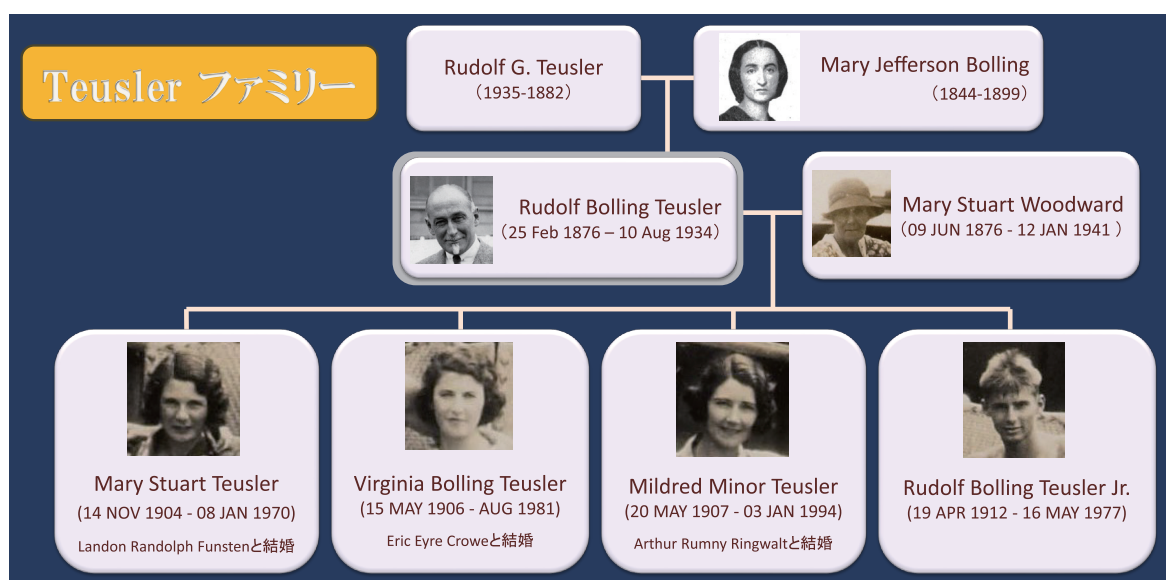
むすび

著者紹介

改訂にあたって

大学史編纂・資料室

第1章 生い立ち



1. トイスラーの父

聖路加国際病院初代院長トイスラーは、1876年（明治9）2月25日、米国ジョージア州ロームで生まれました。彼の父はやはり、ルドルフ・トイスラー（以下、トイスラー（父））と言い、プロイセン（ドイツ）のポツダム市出身でした。その祖父（トイスラー院長の曾祖父）は医師であったと言われています。母はメリー・ジェファースン・ボリングという名で、バージニア州ローズ・カッテージ市の医師アーチボルド・ボリングの末娘でした。

トイスラー（父）は、ドイツの学校（大学を含む）で教育を受けましたが、父母の勧めに従い米国に渡り南部の州で青年期をすごしました。彼は南部の人々のマナーの良さと快活で丁寧親切な人柄に接し、すっかり南部が好きになりました。彼がドイツに帰って間もなく南北戦争（1861～1865年）が始まりましたが、南部を愛していた彼は4人のドイツ人と共に再び米国に渡り、ニューオリンズですぐに南部軍に加わり、南北戦争の終結まで軍で働きました。南北

戦争では幸いにも負傷することはありませんでしたが、その2年目に腸チフスにかかってしまい、バージニア州ベッドフォードの病院に入院することになりました。そこはローズ・カッタージ市の医師、アーチボルト・ボリングの経営する病院で戦場に近く、主に軍から搬送された負傷兵を受け入れる病院でした。腸チフスに苦しむトイスラーはうわごとを言い、危篤状態で入院しましたが、ボリング医師の夫人と黒人召使いの手厚い看護により、幸いにも数か月後にはほぼ回復しました。ある日のこと、ボリング医師は、元気になったトイスラー（父）を食事に招き、そこで初めて、彼はボリング家の末娘メリー・ジェファースン・ボリング嬢に出会いました。トイスラー（父）は身長6フィート（約183センチ）、髪はブロンドで、病後のためやせていましたが、非常にハンサム、一方メリー・ジェファースン・ボリング嬢は年の頃18歳、やや浅黒い肌でとても美しい娘だったと伝えられています。後日この二人の話では、初対面の時、すでに相思相愛の関係になったということでした。言葉の問題で恋愛には多少の支障があったようですが、意気投合している二人にはそんなことは問題ではありませんでした。程なくして二人は婚約に至りました。婚約後、トイスラー（父）はすっかり元気を取り戻し、再び南軍に

戻りましたが、南軍のリー将軍の降服により南北戦争は終わったのです。

南北戦争の間に、ボリング医師は古傷の悪化のため亡くなり、家は北軍により大部分が破壊され、焼かれてしまいました。そのローズ・カッタージの焼け残った家の応接間で、両家の家族達に囲まれて、トイスラー（父）とメリー・ジェファースン・ボリング嬢は結婚しました。その後しばらくして、トイスラー（父）は新婦を連れ、母兄弟姉妹が住むポツダムに戻り、そこで過ごしました。

5年後、二人は、夫人の生家を訪問するため米国に戻りました。夫人の兄、ウィリアム・H・ボリングは、バージニア州のワイスビルで弁護士になっていました（後に判事）。トイスラー（父）は、1865年頃に、アメリカの市民権を得ていたので、夫妻はアメリカに永住する決心をしました。

アメリカに戻った彼は、ワイスビルの学校で、古文と国語の教師を数学期勤めた後、ジョージア州のロームという小さい町に移り、ローム女学校で、ドイツ語と音楽の教師になりました。トイスラー（父）のことは、この地方では教養高き有能な教師、良きピアニストとして、人々の記憶に残っているとのことでした。

2. トイスラー誕生

ルドルフ・ボリング・トイスラー（初代院長

トイスラー、以下トイスラー）は、ここローム

で二人の一人息子として1876年2月25日、生を受けました。その名のルドルフ・トイスラーは、父の名を継いだものであり、ボリングは、母方の姓を取ったものでした。

トイスラーが生まれた後、家族はノーフォークに移り、2年間そこで暮らしました。アメリカで出版されたトイスラーの伝記「Dr. Rudolf Bolling Teusler An Adventure in Christianity」の著者であるロビンズとマックナイトは、この息子ルドルフが生まれつき持っていた「怖いもの知らず」という特徴的な性格について、次のような逸話を書いています。彼が4歳の時、市内を走る路面電車に「飛び乗り飛び降りる遊び」

を毎日やっていたというのです。伯父のボリング判事は、その遊びが危険なことを両親に告げ、止めるよう注意しましたが、両親は本人に任せておけば良いと、その注意を気にも留めませんでした。幼児期のトイスラーのこの気質は、壮年を過ぎる頃まで続きました。怖いもの知らずの冒険好きは、日本流の言い方をすれば「暴虎馮河（向こう見ず）」であったのかも知れません。しかし彼は何か物事を計画する時、常にうまくいくという自信を持って行動していたことは間違いないと、ロビンズとマックナイトは書き記しています。

3. トイスラー父の死

1881年、トイスラーの父は、夫人と息子とを伴って訪れたワイスビル市の町を散歩中に、心臓発作を起こし急逝しました。

未亡人となった母と、わずか4～5歳の息子ルドルフ・トイスラーは、伯父のボリング判事方に世話になることになりました。この伯父は、9人の子どもを抱えているにもかかわらず、喜んでトイスラー母子を受け入れ、家族同様に接しました。トイスラー少年は、この家をいつも‘我が家’という程親しみを持っていました。彼は、医学校に進学するまでの11年間ボリング家に世話になりました。

トイスラーの母は、人の好意にいつまでも頼ることは、彼女の自尊心が許しませんでした。

幸いにも彼女は、夫やドイツでの生活の中でドイツ語に親しんでいたもので、人に教えることも可能なほどドイツ語の知識を持っていました。しかし実際には教えた経験が無く、そこで評判の良いドイツ語教師の兄弟が住むサラトガ温泉（ニューヨーク州、米国独立戦争の有名な古戦場）へ行き、ドイツ語の教授方法を二人から教わりました。2年後、自信を得てバージニア州のゴルドンビルで語学の教職に就き、その翌年にリッチモンドのハイスクールのドイツ語教師となりました。彼女は非常に熱心でまた努力家でもあった為、評判の良い教師となりました。そのハイスクールの他にも数か所私立学校で教鞭をとり、また家に来る若者たちにも教えまし

た。その精力的な行動に、親しい友人や親戚は驚きを隠せませんでした。そしてどんなに多忙でも、彼女はルドルフ少年への教育を決してなおざりにはせず、就学前に家庭教師をつけ、次に私立学校にも通わせました。そしてリッチモンドで最優秀校とされる、ノレイ・スクールに入学させたのです。また、トイスラー夫人は学

校教育の補習としてトイスラーを度々小旅行にも連れ出しました。旅先の地域についてその歴史や習慣等を予め本で調べることが、彼に豊富な知識と探究心を植えつけました。バージニアでのこの小旅行によって得た、自分を取り巻く環境を観察する能力は、後日、世界にまで広がられた彼の事業遂行に役立ったのです。

第2章 リッチモンド

1. 学生時代

トイスラー夫人は息子に社交的センスを持たせるため、ダンスやパーティーに出ることを薦めました。まだ子どもだったトイスラーはそれをあまり好みませんでした。

ノレイ・スクールでは非常によく勉強して成績は優秀で、学年の終りには次の年の授業料免除のスカラシップを獲得したほどでした。しかしトイスラーは母親の言うことを何でも聞くようなおとなしい子ではありませんでした。どこの学校でもあることですが、新入生を上級生が棒や皮紐でなぐるといった手荒い新入生歓迎のセレモニーにも大いに参加していたのです。母はトイスラーのそういう乱暴さを戒めましたが、彼の乱暴はなかなか治りませんでした。例えば、12歳の時、ある裕福なお屋敷の庭の前でボール遊びをしていて窓硝子を割ったエピソードがあります。家の主人は罰としてそのボールを取り上げ返してくれません。そこで子どもたちはその仕返しにと壊れた窓硝子の穴へ水道につないだゴムホースを差し込み、水道の栓を開けたままで凱歌をあげて引き上げたというのです。おそらくその部屋は水浸しになり、家主は

カンカンに怒ったことでしょう。後年トイスラーは当時を思い返して、誠に恥ずかしいことだと話したそうです。

ノレイ・スクール卒業直後の頃は、猛勉強のため、ひどい心身衰弱となり、ワイスビルで長期静養を取ることになりましたが、その静養期にもルドルフはボリング家の従兄弟との登山やアウトドアスポーツを楽しんでいました。

1892年にはすっかり健康な体に戻り、トイスラーはリッチモンドのバージニア州立医学専門学校に入学しました。まだ17歳にも満たない時でした。

バージニア州立医学専門学校の歴史は古く、建物は古風で学内のあちこちにはエジプト風（ナポレオンのエジプト遠征を表す）のデザインが取り入れられ、東門には2本のオベリスク（エジプトの大きな石柱）が建てられていました。同級生の話によれば、当時のトイスラーは、身長はそれ程大きくないものの、短く刈りそろえられた黒髪と整えられたヒゲをもち洗練された服装をしていたということです。

トイスラーは講義には必ず出席していまし

た。当時医科の課程は2年であり、1年目ではほとんど総ての講義を終わり、2年目は初年の課程を繰り返しかつ補足するというやり方でした。いわば米国での学問の始まりの時期ともいえる時代で、医学においても研究や施設が急速に変化を遂げようとしている時代でした。

バージニア州立医学専門学校では、初めて、外科系患者の講義と手術を関連させて教えるという新しい方法が行われました。まさしく外科の臨床講義です。トイスラーが外科の仕事に興味を持ち始めたのはこの臨床講義からでした。

トイスラーは同僚から「Fine Fellow」と言われ人気がありました。学科は飛び抜けて優秀ではありませんでしたが平均以上の学生でした。バージニア州の医師試験官の記録によれば「彼

は正規の試験を受けて免状を授与された。平均点88点。1894年4月18日」とあります。卒業後間もなく彼は解剖学教授ドクター・ルイス・ボシャーの助手として診療業務に、またリッチモンドのメモリアルホール病院及びニューヨーク市のベルビュー病院で研究にも携わりました。トイスラーはまだ年齢が19歳未満でしたので、州の法律では独立しての医業が許されなかったのです。

1896年、21歳の時に母校バージニア州立医学専門学校の組織学・病理学・細菌学の助教授になりました。彼はリッチモンドにいる間は母校の教授陣との関係を絶やすことはありませんでした。

2. キリスト教徒として

トイスラーは、少年時代からキリスト教の環境の中で育ち、その教育を受けました。伯父のボリング判事は熱心なキリスト教信徒で、セントジョン教区の教会委員であり、信仰奉仕者（レーリーダー：牧師不在の時礼拝式を代行する信者）でもありました。トイスラーは、この

伯父の影響を強く受け、1889年7月に堅信式を受けました。彼は生涯この伯父の宗教的教えに感謝し、忘れることはありませんでした。大学の隣にあったモニュメンタル教会に欠かさず出席し、かつ聖アンデレ同胞会の有力な一員として活動しました。

3. メリー・スチュアート・ウッドワードとの出会い

トイスラーは開業して間もなく、メリー・ス

チュアート・ウッドワード嬢と知り合いました。

ウッドワード嬢の父、ワナー・マイナー・ウッドワードは、リッチモンドの大実業家でした。ウッドワード家は、バージニア州の古くからキリスト教を信仰する名家であり、由緒ある家柄でした。

トイスラーとメリー・ウッドワード嬢が最初に会ったのは、1895年の冬で、郊外の小さな湖でした。ウッドワード嬢はアイススケートで後向きに滑っていた時に、突然後から押されて倒れ、膝をつきました。はっと気がつくと、陸軍の青のオーバーコートを着たハンサムな青年が立っていたのです。トイスラーは失礼を詫び、この湖の先の方は氷が裂けて水面が出ていたので、危険な場所だと説明しました。そこに双方の友人たちが集まり二人を紹介してくれたので初対面の気まずさも忘れ、その日の午後は二人でスケートを楽しみました。

数か月して、この二人はまた出会いました。リッチモンドから十マイル離れたアレングレンという美しい所には別荘がいくつもあり、それは夏期の保養者のために開放されていました。当時陸軍大尉の階級で外科医補であったトイスラーは、母とともにアレングレンを訪れていま

した。そこに偶然ウッドワード家の人々も来ていたのです。湖でのロマンチックな出来事を知らない母は、ウッドワード嬢とその両親に息子を紹介しました。その夜、トイスラーは、ウッドワード嬢とは以前湖で会ったこと、そして彼は彼女と結婚したいと思っていることを母に告げたのです。相愛の二人は、その後の2週間を、美しい松林の中をサイクリングで楽しく過しました。

その後ウッドワード家の両親も、この若い二人は、ただの関係ではないと気が付きました。そして父のウッドワードの内諾を得て、もし2年後まで二人の気持ちが変らなければ結婚しても良いということで、両方の親と本人同士の合意が成立したのです。

その2年後、1898年7月21日、二人はウッドワード家で結婚式を挙げました。司式は、ウッドワード家の親類のベンジャミン・E・デニス牧師、祝辞を述べたのはウッドワード嬢の祖父、ドクター・カンセイ・スチュアートでした。新婚旅行は、オター山の麓に近いモンズ村でした。この村は風光明媚な所で、二人は散歩や乗馬やサイクリングで約1か月を過しました。

4. 母の死、そして開業医としてのトイスラー

新婚旅行から帰った二人は冬を迎えるまでリッチモンドのウッドワード家に仮住まいし、数か月後新居に移りました。新居では診察室を地下におき、診療所の看板も掲げました。その

頃、トイスラーの母は体調を崩し回復が望めなと思われるほどに衰弱していました。夫婦は新居の2階を母の部屋にあて手厚く看病しましたが、その甲斐もなく翌年の春亡くなりました。

そしてリッチモンド市バリウッド墓地のウッドワード家の墓に埋葬されました。

トイスラー診療所の看板は、弾力のある金属板でできていて風が吹くと鳴り続けるという変わったものでした。これが市民の注意を引いたのかも知れません。彼の診療所は、次第に繁盛して行きました。その頃、繁盛する医者には馬を持つことがステータスでしたが、トイスラーも2頭の馬を持つことになりました。彼は開業医としてのかわら、出身のバージニア州立医学専門学校での仕事にも携わるようになりました。

その頃の夫妻の唯一の楽しみは、毎週土曜日の午後に、ある狩猟クラブ主催の狩りに参加し、狐を追跡して山谷を駆け巡ることでした。彼は動物愛好家であったので、狐を殺すための狩りは好みませんでした。それを裏付けする逸話が残っています。狩猟会の時のことです。一匹の狐が犬に追われて樹に登り、犬に吠えたてられていました。トイスラーは見るに見かねて、も

し自分が樹に登って狐を捕えたら自分のものにしてもよいかという約束を仲間にとりつけ、重い袋をもってその樹に登り狐を捕えたのです。彼は狐を助けるつもりだったのですが、狩りを続けたい狩猟クラブの連中に反対され、仕方なく狐を助けることをあきらめました。その日、夫妻はそのことを残念に思いながら家に帰ったということです。

彼を知る友人たちが不思議に思っていたことは、当時彼がリッチモンドの田舎で医師になる希望を持っていたことでした。彼は無難な都会の医師よりも、人の行きたがらない所で、事業あるいは冒険をしたかったのです。その例としてこういう話もあります。バージニアの田舎に住む英国人医師が故国へ帰ることとなり、家畜付き・土地付きの医院が空き家になったので、トイスラーはそこを継ぐことに大いに乗り気になりましたが、その時は母の反対にあい、あきらめたということでした。

第3章 決断

1. 日本行きを決めるまで

1899年夏、トイスラー夫人の兄、ドクター・エドモンド・リー・ウッドワードがリッチモンドにトイスラー夫妻を訪ねてきました。ウッドワード医師は米国聖公会の外国伝道部の任命で中部支那(当時の中国の呼び名)にミッション・ドクター(宣教医師)として行くので別れを言いに来たのでした。話は自然と支那でのミッション・ドクターのことが主となり、トイスラーは黙って熱心に聞いていましたが、最後に口を開いて言いました。「誰もやらない仕事をやることは非常に賛成だ。この都会で私は診療所を繁盛させる自信はある。しかし、このリッチモンドで開業しようとする人は何十人もいるだろう」。トイスラー夫人とウッドワード医師は、トイスラーが本気で言ったのか一瞬疑いました。しかし、彼が本気であるとすぐにわかり、トイスラー夫人は「ルドルフ、あなたが行くところには私もついて行くわ」と言いました。

ウッドワード医師はニューヨークの聖公会伝道協会幹部の人々から東京に空き家の小さい病院があるという報告を聞いていました。しかし伝道協会の秘書のドクター・キンパーや、他の

人々は、東京での仕事は発展する可能性が非常に少なく、将来も多くは望めないと悲観的な意見でした。この「将来のない」という点が、逆に「あまのじゃくな」トイスラーの好奇心に火をつけたのでしょうか。おまけにトイスラー夫人の体調を考えると、支那よりも日本の気候のほうが適しているという判断もありました。彼はウッドワードの意見を聞きいれて、ニューヨークの伝道協会本部(チャーチ・ミッション・ハウス)に東京の詳しい情報を求めました。その返答を受取ると直ぐに東京行きを決心し、教会からミッション・ドクターの任命を受ける手続きを進めたのです。これが、彼が東京の聖路加国際メディカルセンター(St. Luke's International Medical Center)建設の大事業につながる最初の一步だったのです。

トイスラーのビジネスライクな性格は、手紙のやり取りでニューヨークと交渉することが、生温くてたまらず、自身でニューヨークへ行き伝道協会本部の人々と直談判をすることに決めました。幸いにも夫人の伯父の、ジョン・ダグラス・ウッドワードから、自分が欧州旅行で不

在中、所有するアパートの一室を使用して良いという話があり、トイスラー夫妻は喜んでそれに従いました。そしてトイスラーは自分が治療中の患者を同僚に託し、1899年の晩秋にニューヨークへ行きました。そこで日本へ行く交渉のかたわら、ニューヨークの町を見物し、特に五

番街を散歩し楽しく過しました。しかし、チャーチ・ミッションの交渉は遅々として進まず、この話はだめになるのではないかと心配になっている時に、思いがけないことから、彼の日本行きが急遽決まったのでした。

2. 北東京教区医療宣教師（メディカル・ミSSIONナリー）となる

ウッドワード医師は、支那へ向かう途中、船が横浜に寄港したので、東京へ足を伸ばしマキム主教に会いに行きました。マキム主教は会うといきなり、「リッチモンドの若い医師、“Teusler”を知っているか」と尋ねました。ウッドワードは自分がトイスラーと親戚であることやトイスラーの人柄等を詳しく話しました。即座にマキム主教はニューヨークへトイスラー採用の電報を打ち、これによりトイスラーの日本行きが確定しました。その資格は、北東京教区の医療宣教師となりました。

トイスラーはすぐにリッチモンドに帰りました。日本へ行く前の仕事が山ほどありました。家を整理すること、自分の受持っていた患者を

他の医師に依頼すること、友人たちに別れを告げること、そして最後に、バージニア州立医学専門学校の教授職の辞職などでした。

トイスラーが日本へ行くと聞いて、リッチモンドの人々は非常に驚きました。若くて人気があり、医師として輝かしい将来が待っている彼が、なぜ、この気候のよい、そして友人の沢山いるリッチモンドを捨てて、何を好んで遠い地へ行くのであろうかと、大いに訝（いぶか）り、かつ残念に思ったのです。それは無理のない話でした。当時、米国の知識人の中でも、東京が日本なのか支那なのか知らない人が、たくさん居たような時代だったからです。

第4章

病院の揺籃時代 (はじまりの時期)

1. 東京到着

1899年12月27日、トイスラー夫妻の渡日を送る礼拝が、ニューヨークのチャーチ・ミッション・ハウス（聖公会本部）で行われました。その3週後に夫妻は、サンフランシスコから「香港丸」に乗って、横浜に向かって出発しました。赤黄白緑の紙の長いテープが、船の客と陸の見送りの間に投げ交され、別れの声が鳴り響く中を船は進み、美しいテープはちぎれて波に漂いました。チェスターと名づけた愛犬（コリー）の乗船が許され、一緒に日本に行くことができることで二人は大満足でした。

この航海は通常18日かかりました。その間は、船客はデッキでのスポーツなどで退屈をしのぎ、時のたつのを忘れるのですが、トイスラー

は進んでその余暇を楽しみ、色々な世話役もこなしていました。また、トイスラー夫人はピアノを弾いて人々をもてなしました。航海は静穏快適で、風も手伝って船の進行が早く、横浜には予定より1日早く着きました。そのため困ったことに、東京の聖公会アメリカンチャーチ・ミッションの人達が、誰も迎えに来ていなかったのです。全く知らない土地に来て、言葉は通じず、風俗習慣も皆目わからない所に投げ出されて途方に暮れる状況でしたが、こんなことに挫けるトイスラーではありませんでした。彼一流の強引さと巧妙さをもって東京築地の目的地に到着しました。彼等の荷物もすべて支障なく到着したのです。

2. 築地での暮らし

トイスラー夫妻は一旦ホテルに落ちつきました。最初に銀座を散歩して時間を過ごし、その翌日築地に行ってマキム主教に会いました。家

具調度の備わった築地13番（現 明石町6番あたり）の彼等の家に入ったのは、その2か月後になります。

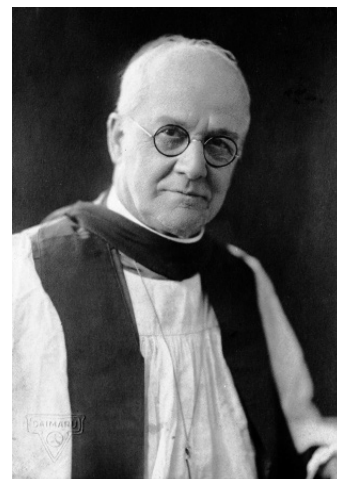
偶然にも病院の東隣ブロックの土地（隅田川添いの土地）で、メソヂスト伝道部の土地が売りに出ているのをマキム主教が知り、トイスラー夫妻の住居として購入したのです。トイスラーは、築地13番に住み始めて2年後、この新しい住居に移り住みました。そこには1923年の関東大震災まで住みました。当初この家は荒れ放題の狭い家でしたが、彼が希望するような、改築費をマキム主教から捻出してもらうことはできませんでした。彼は知恵をしぼって、日本人のcontractor／建築請負業者に頼んで、古い狭い家を見違えるほどに改造し、また敷地内の一部に美しい樹木を植えた温室を作りました。これは贅沢とも思われる庭でしたが、実はこの業者が他の工事で不用になった良い庭木を持って来てくれたため、資金はほとんどかからずに済んだのです。こうしてトイスラー夫妻の家は外観上非常にスマートで快適な住居となりました。当時（1900年（明治33））、この家の傍らを流れている隅田川は、とてもよく澄んだ綺麗な川で、行き来する舟（主として和船）も少なく、海や川から吹きくる微風も心地よく、誠に住み心地のよい住居でした。

トイスラー家は、日常生活を一層充実させるために勤勉で真面目なコックを雇いました。7円／月の手当を貰っていたこのコックは30年間この家庭に勤めました。私（中村徳吉）は何度かこのコックに会いましたが、この人は股関節に異常があったようで、多少体をそらして歩く癖がありました。

こうして、トイスラー夫妻の日本での生活が始まりました。

来日して数日後、マキム主教からこれから働く病院の建物を案内されました。中には破れた数床のベッド、数枚の毛布、木の柄のついた外科用器具などが残されており、前任のミッシェンドクター（宣教医）が、15～6年前に購入し使用していたものと思われました。

トイスラーが受け継いだこの建物は病院と呼ぶにはあまりにもかけ離れ、米国人の目から見れば、まるで小屋と言って良いような貧弱なものでした。数年後、やっと病院らしいものが出てきた時、マキム主教が最初の時のことを思い起こし「初めてトイスラーにあの小屋を紹介した時は実に気の毒に思った。トイスラーはただ一言“Is this all that I am to have?”と言っただけであったが、彼の顔や眼は明らかに失望していた」と、言いました。トイスラーは、ここでミッション・ドクターとして、全くのゼロから出発するのだと覚悟したのです。



マキム主教

3. 病院の萌芽期

トイスラーは、1900年、米国を去る時から美しい髭（ひげ）をたくわえていました。彼は美髭のコンクールに出て、高い評価も貰ったこともありましたが、このことは年齢よりもふけて見えるので、医師のような人の信頼を必要とする職業にはこの風格は非常に好都合でした。

開院当初、トイスラーは先ず日本語を習い、日本人の習慣を習得し、メディカルミッションの事業を成り立たせるため懸命に働きました。その他、彼個人に自由診療を特別に依頼する人には、トイスラーのプライベート患者として、料金を取って治療しました。彼は、その収入を全て病院の改修費、維持費に廻しましたが、このことは、最後まで続けられました。かつて、立教の総長であり京都地方区の主教となり、最後に米国聖公会の大主教（プレサイディング・ビショップ）となったヘンリー・タッカー（トイスラーとほぼ同じ時期来日）は、当時のことを次のように語っています。

「聖路加病院は貧弱な施設と収入とを基に、

沢山の施療診療をする必要があったので、トイスラーは、彼個人の特別患者（Private Patient）から受けた自由診療収入の大部分を病院会計に入れて、施療診療の費用に廻した。」

トイスラーはまた、市内に薬局を開き（東京市京橋区尾張町新地2番地 聖路加病院薬品部：現 銀座5丁目あたり）歯みがきや、化粧品を売り、必要な時にはレジにも立って物を売ったこともありました。東京のある英米人社交界の会員（英米人会）が、「トイスラーはトレーズマン（商人）だから、我々の会には入れない。」と言ったという冗談のような話があります（マキム主教の後日談）。この店の利益も勿論、病院の経費の為に廻されました。私（中村徳吉）が病院に来た頃（1914年）、この薬局はまだ銀座通り西側、当時の小松ストアと資生堂の中間にあったと記憶しています。

彼は、始めから完全な病院を作る計画を持っていました。1901年の初冬頃に建設する予定をしていましたが、実際には、1902年の2月、2



京橋区尾張町新地2番地 聖路加病院薬品部

つの大部屋と5つの個室を作り、患者を収容しました。その場所は木造旧館の北西の角に当ります。(現 救命救急センターの場所)

シェルシェウスキー (トイスラー家と親交のあった牧師、支那に派遣、来日して聖書の支那語翻訳を起業) の娘シェルシェウスキー嬢は、新設の病院を見て建築の完璧さに驚愕し、以前の貧弱なバラックと比べて「魔女が魔法の杖を振って、一夜の内に変貌させたようだ。」と言ったほどでした。

この時代は、病院の萌芽期というべきものでした。当時における日本の医療全般も揺籃時代(ようらんじだい)で非常に御粗末なものでしたから、当時の日本人の目からみれば、この病院は立派なものと写ったのです。職員は、最初、院長のトイスラーと看護婦の荒木いよの二人きりでした。荒木は、立教女学校(当時築地にあった)の卒業生で、ミス・マン宅でトイスラーに会いました。トイスラーは、彼女が賢く心から

看護の仕事に忠実な点を見込んで彼女を米国リッチモンドのオールドミニオン病院に送り、米国式の看護の教育を修得させました。荒木は臨床研修を終え、1902年1月、日本に帰りました。幸いにそれは新病院開設に丁度間に合ったので、直ちに看護の勤務についたのです。当時、病院はトイスラーと荒木の二人で全てのことに対応しなければならず、看護婦である荒木は昼夜なく働くことが度々ありました。たまに入院患者があると使用人をトイスラー宅に送り、シーツ、パジャマを借りて来る、患者の食事はトイスラー夫人の手料理で提供されるといった有様でした。これらの不備が数年の内に解消されたことはもちろんのことでした。荒木は看護婦長として病院の発展に寄与し、1933年に240床をもつ鉄筋6階建ての新病院が完成した翌年、久保徳太郎(第二代院長)と結婚するまで総婦長としてその任務を果たしました。

4. 病院の発展のために

トイスラーは、病院の設備や建物の拡大に伴い、より広い社会奉仕、より質の良い患者サービスを目指しました。それには日本で著明な指導的立場にある医師と接触し、交流を持つことが必要と考え、これはまた病院の診療技術向上に大いに役立つことであると確信していました。

当時、東京帝国大学の講師として、外科医として名声高かったドイツ人スクリバ(Julius

Karl Scriba) は、内科学のベルツ(Erwin Von Baelz)とともに、日本へドイツ医学を導入した貢献者でした。スクリバは狩猟を好み、家には世界の珍しい猟銃を収集し、自慢の猟犬を飼っていました。同じく狩猟好きで(後日狩猟の残酷さを嫌い狩猟はやめる)、ドイツ人の血をひくトイスラーは、狩猟を介してスクリバと早速懇意になり、医師として職業上の交流を持

つようになりました。スクリバが1902年に帝国大学講師を退職すると直ちに彼のために手術室を整備し、スクリバを病院の有力な外科スタッフとして迎えたのです。スクリバは、それから1905年に死去するまで聖路加病院のスタッフとして施術診療をしました。

このことから、トイスラーと東京帝国大学医科大学との繋がりが出来たのです。



東京大学構内にあるベルツ（左）と
スクリバ（右）の胸像

Julius Karl Scriba（ユリウス・カール・スクリバ）
1848 ～ 1905

Erwin Von Baelz（エルフィン・フォン・ベルツ）
1849 ～ 1913

その後間もなく東京帝国大学医科大学外科主任教授、佐藤三吉が（教授在職中であつたため、聖路加病院の専任スタッフにはならなかった）スクリバ同様診療上の顧問として相談を受け、手術も行いました。トイスラーは米国で2年課程の医学専門学校を卒業し、その後1～2年で来日したので、外科に興味をもち実践を積んできたのですが、25歳の若さでは熟達の域には達していませんでした。聖路加病院でトイスラー院長が標榜（ひょうぼう）する外科技術は、当時日本の外科学の最高峰であつた、スクリバ、佐藤三吉に負うところが多かつたと言わねばな

りません。殊に佐藤三吉は、1923年関東大震災の後まで顧問であつたので多大の影響を与えました。私（中村徳吉）が1914年病院に来てから十数年後まで、佐藤三吉とトイスラーの二人が、外人の患者部屋で立ちあい、相談し合っている所に居あわせたことが度々あります。また、トイスラーと私（中村）二人で佐藤三吉執刀の手術を見学したこともありました。

病院本館（現旧館）落成年の1933年、東京帝国大学の塩田広重外科教授と稲田龍吉内科教授が同大学を定年退職し、その翌年、顧問として聖路加に来るようになりました。（1934年8月にトイスラーは逝去）。終戦後、1955年東京大学の大槻菊男名誉教授が顧問として来院、ケースのあるごとに手術を願うことになりました。

スクリバに始まった東京帝国大学外科と聖路加との関係はこのように長いものでした。

トイスラーは病院が発展し社会に十分貢献するためには、どうしても日本人医師の協力がなければならぬことに気がついていました。久保徳太郎は1902年に東京帝国大学医科大学を卒業し間もなく聖路加病院に来て、トイスラーを助けることになりました。年齢はトイスラーより3歳年上でした。専門は産婦人科（番町にあった先輩産科医榊順次郎の病院とも関係を持っていました）で、彼の産婦人科の力量は榊病院における研鑽によって得られたものと思われました。久保は、トイスラーのパートナーとして、副院長として、また募金活動のために渡米し不在がちであつたトイスラー院長の代理として、病院運営を全うしたことは忘れられないことです。トイスラー、荒木いよ、久保徳太郎という

三本柱の基礎の上に病院は次第に発展していき
ました。1911年前後、内科に堀内彌次郎、皮膚
科に飯田英作が入職し、そして病院は、それま
での建物の上に増築して4階建てとなり、施療
入院患者用の大部屋2室もでき、治療設備も整
い、レントゲン機械も備わり、内、外、皮、眼
科（眼科には短期であったが英国人医師がいま
した）にはそれぞれ主任医と助手がおり臨床検
査室も（病理、細菌を主とした）でき、当時の
日本の標準から見ると、70近くの病床数をもつ
立派な総合病院にまで発展しました。私（中村
徳吉）は病院が四階建に増築する最中（1910年

頃）、堀内彌次郎に面会のため病室を訪ねまし
たが、1914年に就職した時には増築は完成して
いました。トイスラーが日本の土地を踏んでか
ら、ほとんど彼一人の力で（トイスラーはミッ
ション・ドクターとしての俸給を、ニューヨー
クの教会本部から受ける以外は、病院の建築ま
たは経営費を十分に貰っていなかったと思う）、
わずか十数年のうちにこれだけのものを作りあ
げたのは、それだけで社会に対し、教会に対し
ても大きな貢献をしたと思うのです。実際にこ
の病院は美しく、人々の信頼も厚く、評判の良
い病院でした。

5. 国際人トイスラー

トイスラーは米国で、ミッション・ドクター
として日本人に医療を施すため、太平洋を越え
て日本に渡る決心をした時すでに国際人では
した。19世紀末ごろ、文化的に日本は未成熟で米
国人から見ると後進の発展途上国と見られてい
たに違いありません。日本という国の存在すら
知らない米国人は沢山いたと思われるのです。
彼らにとって日本は地球の裏側の国でその国民
の風俗、言語、人情などに関する知識は皆無で
した。このような国の人々の中に入って医療を
施すにはどれだけの勇気と決意を要したことであ
ろう。これを裏付けるのは国際的な人道愛であ
った。彼は来日するやいなやさまざまな困難に
ぶつかりました。診療所自体をはじめ、医療機
器や薬品まですべてを新しく調達しなければな

らず、彼の日本における医師としての資格も未
確定でした。当時、日本の医師法は不完全なも
ので、数年後医師法が改正され、医師試験に受
かるために医学校の卒業資格が必要となるまで
は、正規の医師訓練を経験しない者でも試験を
通過すれば免状を取得できたのです。トイス
ラーは日本の医学校を卒業していませんでした
が、築地では（元は外国人居留地であって外国
人の間で許容されていた慣習が残っていたた
め）医師免許証なしで病人を治療することがで
きました。しばらくしてトイスラーは日本人の
医師を雇い入れ日本人の患者の診療に当たらせ
ました。そして彼自身は米国人を主とする外国
人患者を治療したのです。外国人のみを診療す
る分には日本の医師免許証は必要なかったから

です。

1902年まで東京帝国大学医科大学の講師をしていたドイツ人医師スクリバは共通の趣味とトイスラーの父がドイツ人であった事からも親交が深まり、聖路加病院の顧問として病院の患者の手術をしました。トイスラーはスクリバと一緒に手術を行うことで彼自身専門的な技術を習得しましたが、スクリバは1905年に急逝しました。

トイスラーは医療に専念すること十数年、その間に4階建て木造ペンキ塗りではあるものの当時の日本人の目から見たら誠に華麗な病院を建てたのです。西側正面の左右にギリシャ風の高い円柱が有り、全建築に調和する美観を呈していました。そのうち男女それぞれ10床の大部屋2室は施療（無料）患者用にあてられました。

キリスト教の病院という建前から施療は必然的に病院事業の重要な部分を占めていました。外来は早朝から受付をはじめ新患再来を合わせて60人から80人もの施療を行っていました。この費用はわずかの寄付を除いてほとんど有料患者からの収入により割り当てられました。教会からの補助もありましたが政府からの補助はなく、独立採算でありこれらの施療を実施することは容易なことではありませんでした。こうした中、日本人医師も次々に内科、外科、産婦人科に加わり、比較的小規模ながら順天堂や赤十

字病院等と肩を並べる病院に成長したのでした。

スクリバと並行して東京帝国大学医科大学外科学講座を担当していた佐藤三吉がスクリバの死後、顧問という名目でトイスラーの診療の相談に応じ、時には手術を行ったことは前述したとおりです。佐藤三吉は外科学において我が国最高の人であり、政府官僚からの信頼も厚く皇族の方々の健康相談の為に宮内省にも行っていました。言動は明晰沈着で立ち居振舞いは静粛、一人の人間として非常に優れた人物だったと言えます。彼の人格は外国人のトイスラーも高く評価するところとなり、日本人と外国人のいずれにも頑固な態度を示す癖のあるトイスラーも、佐藤三吉に対してだけは敬意を失することなく謙虚な態度を持って対応するのが常でした。

佐藤三吉は長い期間聖路加病院と関係が続けていましたが、定年後は本郷駒込の邸宅にこもり、悠々自適の生活を送り患者を診ることは滅多にありませんでした。一度トイスラーの大切な米国人患者を診療してもらうため連れて行った際に、佐藤三吉は一応触診して「君、これは悪性だよ。」と言いました。良性か悪性かは即時に判定できない場合があるのに、一触診で診断名を付けたのは流石に佐藤三吉だと私（中村徳吉）は感嘆したのです。

第5章

国際人 阪井徳太郎と トイスラーの活動・評価

1. 阪井徳太郎氏のこと

私（中村徳吉）は、当時病院はトイスラーを中心に久保、荒木の三本柱の上に立っていると書きましたが、特に注目したいことは、病院外にあってトイスラーを助け励まし、大病院建設に非常に尽力した人がいたことです。

それはトイスラーと親交のあった阪井徳太郎です。阪井徳太郎は1868年（明治元）名古屋で生まれ、上京して立教を卒業した熱心なクリス

チャンでした。英語が堪能でその語学力は抜群でした。聖公会から推薦を受けてアメリカに渡りボストンのハーバード大学で神学と哲学を修得しました。数年間のハーバード在学中、彼の得意とする英語はますます磨きがかかり完璧なものとなりました。彼は帰国後キリスト教的教育を目的とする学生会館を本郷に開いて東京帝国大学の学生を多数寄宿させました。

2. 日露戦争の勃発

阪井徳太郎が国際的に活躍する機会がやってきました。日露戦争の勃発です。彼はトイスラーの、日本のみならず米国における活動と事業に最も大きな影響を与えました。トイスラーが夢に描いていた近代的大病院の建築に必要なものは資金でしたが、トイスラーにはその資金はなくまた調達の見込みもありませんでした。その苦心するトイスラーに手を差し伸べたのが阪井徳太郎でした。1902年（明治35）彼は留学期間

を終えて日本に帰り、本郷に前記のキリスト教的修練を目的とする学生会館を建て、14人の帝国大学生を寄宿させました。その1～2年後に阪井は小村寿太郎外務大臣（桂内閣）の下で外務大臣秘書官となり、広く国家の重要な地位にある人々の知遇を得ることに努力したのです。

彼は政界首脳陣の知己を得る資質を持ち、外国の要人と対等に付き合う能力と語学力がありました。彼はいわゆるボストンマンでした。彼

に先立つこと二十余年に枢密顧問官子爵金子堅太郎も同じボストン大学を卒業していました。その関係で金子と阪井の間は非常に懇意でした。

日露戦争が始まると巨額な戦費に苦しむ日本政府は、日本に同情的であった富裕国アメリカ合衆国に公債募集と世論操作のために金子堅太郎を派遣しました。その交渉には多数の人に面会し折衝しなくてはならないことが山積していました。

語学が達者で米国人の心をつかむ技術に長けた阪井こそ、この目的遂行にふさわしい人物でした。金子堅太郎は阪井徳太郎を伴って渡米しました。この二人の活躍が見事成功し、日本政府は必要な戦費を調達できたのです。

日露戦争は日本の勝利に終わり講和会議が米国の東岸、ポーツマスで行われました。ロシアからウィッテ、日本から小村寿太郎が主席外交官として派遣されました。小村は当然秘書官阪井徳太郎を伴って行きました。会議は米国大統領ルーズベルトの仲介で、多少の曲折はありましたが円満に終わり、概ね我が国として満足すべき結果となりました。

阪井徳太郎は外務大臣秘書官を大正初年まで務めましたが、その為政府内の情報を早く入手することが出来ました。明治末から大正初頭にかけて持ち上がった万国博覧会の開催についても、その話は早い段階で彼を通してトイスラーに伝わりました。

3. 新病院建設まで

万国博覧会が開催されると多数の欧米人をはじめ外国人が日本に来ることが予想されました。当時の日本には欧米式のホテルは非常に少なく設備も貧弱でした。特に疾病や外傷の手当てに対応できる施設はほとんど有りませんでした。外国人を招待しておいて宿泊所や病人の処置に不備があっては折角の博覧会が国の恥さらしとなります。ホテルや病院の設備は何よりも配慮すべき優先事項でした。これが国際人トイスラーと阪井の一致した意見でした。

万国博覧会は第一次世界大戦の勃発（1914年）により中止となりましたがトイスラーの国際的大病院の建設構想は彼の心の奥深くに根をおろす

ことになります。1933年にはこの夢の新病院はひとまず完成しますが、その計画の最初から最後まで、資金獲得に関してトイスラーに便宜を与え励まし続けた人が阪井徳太郎だったのです。

大病院建設には広大な用地と資金が不可欠でした。当時の聖路加病院の敷地はあまりに狭く、隣接地には聖三一大聖堂と立教大学校、立教中学校、および立教女学校が有り拡張の余地はありません。築地の敷地なら資金が要らないという利点がありますが、築地には遊んでいる土地は無く、止むを得ず他の場所を探さなければなりませんでした。代替用土地が麻布地区にあるというので、病院の幹部数人が院長のお供をし

て市兵衛町（現 六本木近隣）へ見に行ったことがありました。結局、適当な土地は見つからず、その上、難問題が起こったのです。土地の選択についてトイスラー院長と久保副院長との意見が対立していたのです。トイスラー院長は「山手方面を良し」とし、久保副院長は「築地を離れて病院は存続できない」という意見でした。このことで二人が意見を戦わせている場面を私（中村徳吉）は何度か見たことがありました。後日談になりますが、長い間結論の出ないこの意見の対立は関東大震災によって解消されたのです。

土地と並んで重要なのは建築資金の問題でした。これは設計と大いに関係があることで、最初のうちトイスラーはごく大雑把な見積りを阪井徳太郎に示したようですが、その設計は何度も変更されました。ある時阪井は、トイスラーの病院計画は会うたびに大きくなっていると言って笑ったことがあります。

資金調達は最重要事項でした。何しろ巨大な金額のことですから、国土も基盤も小さく貧しい日本国内の募金では到底間に合いません。巨大で富める国アメリカにおいて大々的に行わなければならないことは確かでした。相手はアメリカの民衆です。その民衆がキリスト教的人道主義を掲げる病院のためとはいえ、日本における施設や日本人のために容易に募金する気持ちになるのか、この辺りの国民的感情をトイスラーはよくわかっていたと見え、大々的資金募集を軽々しく始めませんでした。この点について日米関係の経緯を辿ってみる必要があります。日露戦争の頃、アメリカ民衆は弱小国日本

に対して同情的でした。ところが日露戦争で日本が勝つと、わが国は軍事的にも経済的にも次第に強くなり、他国民に対して慢心を持ち始めたのです。強くなったものには同情が希薄になるのは当然でした。また、この時期にカリフォルニアで日本人の移民問題が起きました。サンフランシスコを中心に急激に増加した日本人が米国の労働者にとって大きな脅威となり、日本人移民の排斥気運と重なって米国民全体に反日感情が広まりました。

このような時に外務大臣加藤高明(大隈内閣)は脆弱な北京政府に21か条の強い要求を突き付けました。この要求は支那（中国）大陸を侵略しようとする意図を表す高飛車なものでした。いつも弱い方に同情するアメリカはここで支那に味方し、日本に対し強い反日感情を表したのです。ところが、日本は逆に日露戦争以来の親米感情を持ち続け、貿易・文化へと交流の面からもアメリカを大いに必要としていました。日米親善が大いに叫ばれました。日本におけるトイスラーの立場は次第に強くなりました。このような日米の様相の中でトイスラーにとって非常に喜ばしいことが起きました。

4. 御内帑金下賜（ごないどきんかし）

トイスラーの国際規模の大病院設立のことが陛下のお耳に入り、5万円の御内帑金がこの事業に御下賜されるということでした。

トイスラーは阪井徳太郎を通じ多くの著名人と知り合うことになりました。トイスラーと親しくなった財界の大御所渋沢栄一、東洋汽船株式会社社長の浅野総一郎は何度か病院を訪れ、講演等により志気を高めてくれました。渋沢の娘婿で日露戦争時の大蔵大臣、阪谷芳郎はトイスラーの事業の後援会理事長でした。このように多くの人の意図は日米親善のために彼の事業を助けることにあり、そしてこれら著名人のトイスラーに対する評価が陛下のお耳や宮内省に達し、御内帑金御下賜につながったのです。

続いて三井家や岩崎家からも5万円の寄付がありました。この件については三井合名会社理事であった阪井徳太郎が外務省、内務省、三井合名の重役や岩崎家に斡旋の労を取ったことによるものでした。

私（中村徳吉）は、皇室の下賜や三井家・岩崎家からの寄附をトイスラーに連絡した阪井に対し、トイスラーが書いた礼状（英文タイプライターで45枚）を見せてもらったことがあります。その手紙にはトイスラーが躍り上がって喜んだことが実によく表れています。彼は建築資金の募集をどのように始めるか計画もできていない時点で、突然皇室から下賜金を、また二大財閥から寄付があったことは彼の事業が日本人に高く評価されている証であるとして喜んだのです。

彼はこれから米国において大々的なキャンペーンを張る上で最上のお墨付きを得たのであり、日本でこのような信用を得たことを示せば米国民衆は彼の演説に耳を傾けてくれるだろうと考えました。阪井徳太郎に出した手紙には「これで私の事業の半分以上が達せられた」とまで書いています。

5. 従軍報道記者を志願したトイスラー

1904年日露戦争が始まり、アメリカから多くの報道記者が来日しました。その中の一人アソシエーテッド・プレス社の主任記者マーチン・エドガンという人が体調を崩し入院してきましたが、それを機会にトイスラーは彼と知己になり、

その後二人は生涯にわたった交友関係を持つようになります。時がたつにつれトイスラーは戦地の報道事業に興味を持ち、遂にマキム主教の同意を得て報道記者となることを志願し、エドガンに承諾をもらいます。トイスラーは日本語

がわかるので通訳としても重宝がられ、戦地での報道任務も任されました。日本政府の報道記者規定に従って服装を装備し、テント、料理道具までそろえました。その上彼は馬を1頭購入しました。しかし、この馬が始末に負えない暴れ馬で、初めての乗馬の際に家族の目の前でトイスラーを泥の中に振り落してしまいました。幸いにも怪我はありませんでしたが、やっと準備万端整い、戦地への出発を目前にしていたところ、トイスラー夫人が体調を崩し、静養が必

要なことと成り、彼は満州に出発する予定であったその日に夫人と共に米国に向うことになりました。

彼が戦争報道記者を志願したのは、報道よりもむしろ戦地での診療実態を把握したい為でした。彼はまた陸海軍の基地病院（ベース・ホスピタル）で視察研修をしました。彼は日本の軍病院が傷病兵を収容しきれなくなった時には自分の病院を彼らに提供する事を申し出て、寺内陸軍大臣を喜ばせました。

6. 病院を大きくするために

聖路加病院の患者数は、1903年9月から1905年9月までの2年間で、大手術126、小手術330、入院患者209、外来77,068人と報告されています。

病院の目覚ましい発展の為には増築を必要としましたが、すでに病院の敷地内には余裕がなく、付近の土地を購入し拡張することになりました（この拡張予定の土地はどの辺りか不明）。この土地の購入費は7,500ドルでしたが、英国公使館のマクドナルド夫人によるコンサート収入の寄付や病院手持ちの金を合計しても、増築費や内部設備など全費用を賄うにはなお20,000ドルが不足し、どうしても他からの援助が必要でした。

米国で静養中だったトイスラー夫人の健康状態が回復したので、トイスラーは早速寄付活動を始めました。1905年は日露戦争が始まって2

年目、小国日本が大国ロシアと戦っているというので、米国民は日本に対し同情的でした。しかし、募金は容易なことではありませんでした。非常な努力の末、集まった金額は予定の半分をわずかに上回る12,000ドルでした。1905年1月、突然スクリバの訃報が入り、トイスラーは資金調達の仕事を中断し急いで東京に帰りました。金額はともかく、トイスラーの募金活動が米国民衆に日本の病院に対する興味を引き、さらに教会の婦人補助団体の関心を引き起こしたことは、寄付金以上の効果を得たのでした。

トイスラーは滞在中に得た募金を持って東京に帰り、病院拡張・補強の仕事に取り掛かりました。そして、1907年には病院は元の3倍の大きさとなりました。マキム主教は隅田川沿いの土地の古い大きな家をトイスラーに与えたので、これが改修され病院の外来診療所と4つの

入院病室となりました。

病院は急増する患者の為に増改築でいつも金槌の音がしていました。

トイスラーは時に激務から解放され、家族とともに休養する必要を認めていた為、海岸や山間地に別荘を借りて夏を過ごしました。タッカー主教も京都からたびたびその別荘を訪れ、ともに夏を楽しみました。

数年の後、トイスラー夫人の両親が世界一周旅行の途中日本に立ち寄り、トイスラー家を訪

ねました。その両親のおかげで神奈川県葉山海岸の山中にトイスラー家の別荘が建てられました。この地は緑の美しい木々に囲まれ、清らかな相模湾の向こうに見事な富士山を真正面に眺望できる場所でした。冬は暖かく夏は涼しく、特に東京から僅か2時間で来ることの出来る別荘としては申し分のないものでした。夏には一家で水泳やヨットを楽しみ快適な日々を過ごしました。この別荘は1923年に人手に渡るまでトイスラー家の安らぎの場所でした。

7. 日本アルプスを楽しむ

1903年当時、日本人で日本アルプスなどの高い山岳に登る人は極めて稀でした。時々英国人や米国人が日本アルプスに登ることがあり、日本アルプスはそうした英国人の登山家の一人が命名したという事でした。トイスラーは山登りを好み、タッカーとともに日本アルプスに度々

行きました。当時、登山家の為の宿泊設備は全く無く、4日間を要する針の木峠や、槍ヶ岳への登山には食事・睡眠などの全ての装備を持参していかなければなりませんでした。道なき道を登り、大小の落石がある危険の中を行きました。当時の山岳は、今日想像もできないほど困



1903年（明治36）8月 トイスラー（右から二人目）タッカーら5人が槍ヶ岳に登山

難で危険なものだったのです。トイスラーの義兄、ドクター・リー・ウッドワードが知人数人と浅間山に登った時、ちょうど噴火が起き、煙は数千メートルに達し、岩石と溶岩が火口から吹き上げられて四方に飛び散りました。一行はあわてて避難しましたが、ドクター・リー・ウッドワードは逃げる時に倒れ、足関節を骨折し、副木を当てた状態で16キロの距離を下山するという悲惨な経験を味わいました。その翌年、米国のキリスト教伝道師が同じ場所で落石により死亡しました。

トイスラーは生来非常に激しやすく、また、強い精神力の持ち主でした。それが時として短気な行動や、冒険好きな性格として表れました。彼はその精神的エネルギーのはけ口を、山岳登

山や病院の拡張、また、その管理と患者治療に向けました。将来を嘱望されたリッチモンドでの安定した仕事を捨て、当時「半野蛮人が住む」と言われた未知の日本へミッション・ドクターとして来たことも彼のこの強い精神力の表れと見るができるのです。

1907年に彼自身、結核感染を疑われる状況に直面しました。彼はいつもの即断即決で直ちに米国に帰り、ノースカロライナ州のナッシュビルで当時実施されていた外気療法（戸外でテントを張って外気の中に起臥する方法。家の中ならば昼夜とも窓を全開しその中で就眠する方法）による厳しい安静生活を守り結核の危機を完全に乗り切ることができたのです。

8. メヂカル・センターのビジョン

1904年から1912年までの聖路加病院は拡張の一途を辿りました。私（中村徳吉）がトイスラー院長に初めて面会に行った時、病床数は当初の2倍の病棟が追加され、表玄関も美しく壮麗となり、屋上には快適な日光浴室があり、礼拝室も外来部に小さいながらもできていました。職員は看護婦30人、日本人医師10人、外国人医師3人でした。

1910年頃は、すでに聖路加病院の名が東京市民に広く知れわたっていました。

病院は日を追って隆盛になりつつありました。この頃に、トイスラーは聖路加国際病院（メ

ヂカルセンター）のビジョンを持つようになり、鉄筋耐火の壮大でモダンな病院を夢に画いていたのです。しかし、彼にはそれを実現するための資金も、また、資金を援助してくれる財閥との縁故も全くありませんでした。彼の米国の友人たちは、彼の希望は非現実的で夢のまた夢であると言いました。一方、彼をよく知る者は、彼は最も創造的で、実践的理想主義者（プラクティカル・イデアリスト）としていました。

幸いなことに病院に対する世間の信用は厚く益々繁盛していきました。特に東京帝国大学講師であったドイツ人のスクリバとベルツの二人が

診療に加わった事で、在日外国人患者も多く集ま

り、日本人の間でも格別の信頼を得たのです。

9. 無料奉仕に対する明治天皇からの褒状

病苦に悩む貧しき人に対する無料奉仕は、当時としては、実に偉大な仕事といわねばなりません。今日と異なり、社会福祉制度のない時代を考え合せれば、一層その感を深くします。特に当時の日本の病院医師は、営利がそのまま本来の姿で、小数の国公立の病院を除いて、人道的動機から憐れな貧しい患者を無料で救助するというようなことは稀でした。施療入院患者を多数受け入れていた国立医科大学の付属病院では、施療患者は、学生に教えるための研究材料のように取扱われ、真に慈愛に満ちた動機から施療をする医師は、非常に少なかったと思われます。

トイスラーの施療事業は広く人々の知ることとなり遠方からも診察を希望する者で病院はあふれました。彼の事業は遂に明治天皇の御耳に達し、美しい花輪と褒状が宮内省からトイスラーに下賜されたのです。この花輪が、長く院長の客間に飾られていたのを私（中村徳吉）も度々見ました。幅90センチ、高さ120センチの硝子箱に収めてあり、絹で作った造花とは思えない程、繊細美麗な20程の花束が美しい籠にさしてありました。下賜された褒状には、次のような言葉が添えられていました。

病院は、多年貧しき人を救い、病傷者にすぐれた技術を施療し、救恤の大なる事業をなしとげられた。この慈善の事業を今後共永く続けられ、世のため活動されんことを希う。

貴下の業績を称讃するため、天皇陛下の御意志に従い、この褒状を贈呈しました。

明治四十四年二月十一日

宮内大臣 男爵 平田 東助

文章の原文は明治調の厳粛なものでしたがトイスラーの伝記「Adventure in Christianity」の著者であるロビンズとマックナイトが英訳して載せたものを日本語に再訳したものです

この褒状は額に入れられ、トイスラー院長の客室に掲げてありました。トイスラーの博愛人道的事業が明治天皇の耳にも達し、宮内省から褒賞が下ったということは、日本社会で、トイスラーが次第に重要な人物と見なされるようになったと考えられます。病院事業が軌道に乗り発展するに従って、土地建物が手狭になり、大拡張が必要となりました。一方胸中深く抱いていた耐火建築の大病院を作るトイスラーの夢（ビジョン）は変わらず、いつかはそのビジョンを実現させるという志は捨てませんでした。トイスラーは病院拡張の為の広大な土地と資金調達を目指しました。

彼はまず総理大臣桂太郎に会い病院の業績・使命・拡張の企画を説明しました。2年後には新渡戸稲造の紹介で後藤新平（後藤新平は桂内閣の有力なメンバー）にも会い、2万5千ドルを病院拡張費として政府が寄付するという申し出を取り付けました。1914年4月、大隈内閣が誕生しました。就任3カ月後の7月1日、彼は政財界・医学界の著名人40人を夕食会に招き、トイスラーの病院拡張案に対し、政府としてこれを認め、日本側から援助する方法について相談しました。その結果、列席者は、院長の計画の後援者となり、大隈伯を後援会委員長に、ま

た、後藤新平・阪谷芳郎（東京市長・元大蔵大臣）・渋沢栄一子爵を副委員長に推すことを決めました。最初に新築のための土地を探してそれを提供するか、あるいは土地購入資金として20万円（約10万ドル）を寄付するかが決議されました。大隈伯の趣旨は、トイスラーの過去の業績とこれから行われようとする彼の事業は、大いなる人道（ヒューマニティ）への貢献であり、また東洋と西洋の医学の交流進歩を促進するものであることとし、我々日本人も相応の援助を惜しまないということでありました。

10. 日米協会での協賛援助

1917年2月、東京において、日米協会の会合が開かれ、聖路加国際病院の計画が認められ、募金活動を容認する決議がなされました。それには日米協会長・貴族院議長徳川家達の署名がありました。そのように、政財界の主たる人々の賛同援助の他一般民衆からも、特に病院で世話になった多くの患者からも、種々な形で寄付がなされました。

特記すべきことは、トイスラーがわずか十数

年前に来日したまだ若いミッション・ドクターであることです。その事業計画に宮内省から陛下の御内帑金が下り、日本の元老や政治家の協賛援助を受けたことは、非常に稀有なことでした。明治大正時代の皇室は、国内に神にも似た尊厳な勢威であったことを併せ考えれば、トイスラーに与えられた栄誉は、絶大なものだったと言えるのです。

11. 寄付に関する補足

〔註〕これは1917年当時のことです。その頃

の10万円は、今の1億円以上の価値があったと

思われます。一介の医師トイスラーが前述したように日本政財界を代表する人々から受けた好意は、決して偶然で一時的な理由によるものではありません。すべてこれらの事情の基底に、日米親善という強い流れがあったことを忘れてはなりません。当時は日露戦争終結後未だ11〜12年しか経っていませんでした。戦争には膨大な資金が必要であり、貧弱な日本の経済力では大ロシアと戦うことは難しく、いきおい、米国に借金をしなければなりませんでした。米国から見れば古典的帝国主義をもって、東アジア、機能不全の支那を侵略しようとするロシアが目障りでたまらない所に、小国日本が勇ましくもそのロシアと戦争を始めたのです。日本に対する同情が一気に集まり、米国は日本に建設資金を貸与することになりました。その折の募債使節伯爵金子堅太郎（ボストン・ハーバード大学出身、同じくハーバード出身の阪井徳太郎と懇親の間柄）と阪井徳太郎等一行がニューヨークに赴き募債を成立させたのです。この頃が、恐

らく日米関係にとって最も良好な時期でした。太平洋を隔てた両国の友好関係は、それ自体が両国にとって喜ばしいことでしたが、日本にとっては日露戦争時の財政支援に対する恩情も手伝い、日米政治家の良好な関係は11年も続いていました。この親善によってトイスラーの計画に対する同意・援助が結実したのでした。

彼の計画は、外交関係を別にしても、それ自身両国民が希望するものでした。病院はキリスト教人道主義を至上として高く掲げ、医師等職員は日米両国民で共働し、看護婦はキリスト教的教養のもと、米国最新式の看護実践訓練を身につけた人々でした。土地建物（大部分は米国からの支援によるものでしたが）は、両方から出され、患者の多くは日本人でしたが欧米人、アジア人も多数診療を受けていました。

簡潔に言えば、聖路加国際病院は日米からなる人・物が見事に融和し、キリスト教人道主義を具現した有機体でありました。

第6章 シベリア

1. ロシアの情勢について

トイスラーが米国赤十字社の要請により、シベリア、ヨーロッパ、ロシアに救護班を派遣したことを書く前に、当時のロシアの政情を簡単に記しておきます。それは、トイスラーがどのようにこの難事業と取りくんだのか、また、それがどのように人道的に高く評価されるものかを理解する必要があるからです。

第一次世界大戦が終った1918年当時、米国の参戦によってドイツの敗北が色濃く、ロシアではロマノフ王朝が倒れ、カレンスキーの民主主義政府が弱いながら支配していました。間もなくボルシェビキの台頭でカレンスキー政権はたおれ、遂に翌年、共産主義政府ができました。その間の1～2年は政派間の闘争で、ロシア全土が無政府状態となり多数の人々はそれに巻き込まれました。白系ロシア人（旧帝政系ロシア人）と赤のロシア人（共産系ロシア人）との戦闘は至る所で起き、あらゆる交通はほとんど麻痺し、産業は停止して物資の欠乏で一般市民の苦難は目に余る有様でした。そこにヨーロッパの方から数十万人というおびただしい数のチェコスロバキア人の捕虜や避難兵がロシアに入

り、シベリアに流れて来ました。元来チェコ人（ボヘミアの人民）は、スラブ系民族で、ロシアに同情的な民族です。当時チェコはオーストリア帝国の傘下にあった為、彼等は不本意にロシアと戦ったのですから、戦闘中に集団でロシア軍に投降するもの数万人、またオーストリア軍の敗退が見えた頃には全軍挙げてロシアに逃げ去ったのです。ロシアは彼等を受け入れましたが、ついにこの形骸化してしまったチェコ軍は、自らの食糧を手にすることも困難となり次第にロシア全域に四散してしまいました。ウラジオストクから遠く（地球の裏側を日本海・太平洋・大西洋と回り）海路でヨーロッパに帰れる道もあるというので、シベリアに流れ来た者も沢山おりました。勿論、このチェコ人たちは、食物以外に衣類・医薬品・医療手当などにも欠乏し苦しんでいました。

2.

米国赤十字社シベリア救護班

救護の手を最も必要としていたものはこのチェコスロバキア人でしたが、ロシア人も無政府状態の下においては、チェコ人同様ひどい状況に置かれていました。

結局、救護を求める者（比較的、食物被服に事欠かない者でも、薬品、医療の必要はあった）は全住民であったと言えるでしょう。シベリアのみならず、9600キロ以上に及ぶ広範なロシア全土に、東西に走る只1本のシベリア鉄道で、膨大な救援物資を搬送しようというのですから容易なことではありませんでした。

最初に、シベリア各地に放置されていたいくつかの病院を修繕・増築して医療に充てる準備をしました。また、医師看護婦の早急な救援を必要とした為、聖路加国際病院から、「米国赤十字社シベリア救護班」の名の下に一団が組織されました。1918年8月7日、その出発の直前に、病院建物の北側に勢揃いし記念撮影をしました。その時の一団が写った写真には米国大使モーリス、久保徳太郎と一行の事務の世話役してくれたジョセフ・ライフスナイダー（ビショップ・ライフスナイダーの弟）の姿も見えます。（口絵の米国赤十字シベリア救護班写真参照）

中村徳吉等は汽車で敦賀に行き、その夜ロシアの2～3千トン級の古い船で、真っ直ぐ北上しました。海上は多少荒れましたが、2日後ウラジオストクに着きました。埠頭では既にロシア入りしていたトイスラーが我々を迎えてくれ

ました。その数週間には東京から派遣された糸井一良、広瀬常雄その他の人々によって、婦人科、泌尿器科の治療所がウラジオストクの町の東端近くに開設されました。

我々聖路加国際病院のスタッフは、ウラジオストクの港口にあるロスキ島（現地の人は、ロスキーオストロフと呼んだ 現在の呼称：ロスキー島）にあった古い、元ロシア海軍の病院（ベッド数およそ150床、改装直後で清潔な病院には30メートル位のポールに星条旗が立てられていた）で診療を行いました。

このロスキ島の病院は、ウラジオストクの町（当時人口13～14万の軍港）から、海上6～7キロの島の高台にありました。救護の基地病院としてシベリア西部の方からも、やや長期治療を要する患者が送られてきました。ウラジオストク港に来ていた米国巡洋艦の軍医長ドクター・ギルという人が病院長で、その下に聖路加から来た池田（内科）、中村（外科）、松岡（耳鼻科）、その他検査室に2名、荒木いよ婦長率いる看護婦20～30名、事務、薬剤師2名が働きました。

後に中部支那からローガンという老医師夫婦が来ました。治療に必要な設備、薬品等が米国から来るまでは、大部分は東京で購入されウラジオストクに送られてきました。

このロスキ島の病院は、シベリアの米国赤十字事業のほんの一部でしたが、人員の構成、設備等は完璧でした。

当時ロシア全体は、内乱あるいは無政府状態であって（カレンスキー政府は無力であった）西部において、モスクワ、レニングラードに占拠するボルシェビキとチェコスロバキアの兵とが対峙して戦い、多くの負傷者が出ていました。全土がゲリラ戦の様相となり、救護事業は非常な障害にぶつかっていました。

聖路加の一団が参加することになった事の始まりは、米国赤十字社から駐日大使ロランド・モリスに、トイスラーをシベリアの救護事業の総指揮監督に任命する電話が来たのです。これは米国の名のもとに人道という大義名分を掲げて行う大事業でした。冒険を好むトイスラーは、これは自分に向いた事業であると言い、二つ返事でこの大事業を引き受けました。そして彼はウラジオストクに飛び、事業に着手したのです。

彼は、次の3人の有力な米国人を顧問として迎えその進言、協力に期待しました。

E・W・フレーザー：長く日本に住む資産家で実業家、立派な紳士として日本人間でも著名
ラングトン・ワーナー：米国無任所（特定の行

政事務を分担しない）領事

ジョージ・S・フェルプス：日本におけるYMCA秘書、誠実な活動家

そしてトイスラー自身は、ワシントンから大佐（カーネル）の階級（ランク）が与えられました。これは半ば軍事的色彩の濃い事業だったので、トイスラーの事業遂行上、大いに役立ちました。

特記すべきは、時の米国大統領ウッドロー・ウィルソンの夫人（最初の夫人とは死別、二度目の夫人）は、トイスラーの従姉妹だったことです。この夫人はこの戦争終結後、ウィルソン前大統領の死後日本に来て、トイスラー宅に数週間滞在しました。我々病院のスタッフ10人余りは、1929年10月5日トイスラーに招かれて、お茶の会でウィルソン未亡人に会ったことがあります。

フレーザー、ワーナー、フェルプスの3人は、船客の混みあう汽船で、夜はデッキに寝るといような不快な航海の後、1918年7月29日にウラジオストクにつきました。

3. 基地病院（ベース・ホスピタル）

気の早いトイスラーは、ウラジオストクへの出発に先だって、本国の赤十字社極東局に、シベリアに送れる人員、医薬品、設備他の救助物資を至急送るよう電報を打っていました。また聖路加国際病院の医師、看護婦等を米国赤十字社の救護班に参入する手続きを取っていました

た。ミセス・アリス・C・セントジョン（後に聖路加国際病院附属高等看護婦学校々長）をその看護婦団の監督に任命し、また、東京の聖路加国際病敷地内に（隅田川沿い敷地内の建物を利用して）約百床の病院を作り、東京の基地病院（ベース・ホスピタル）として、シベリアか

ら送られて来たチェコ兵士等、長期療養を要する患者の受け入れ態勢を整えました。この基地病院は、我々がウラジオストクから12月に東京に帰った時には、約20人のチェコ兵が入院していました。その主治医は米人医師ドクター・マクスパランで、この病院（ベース・ホスピタル）はウラジオストクその他に数か所の病院が完備した後廃止されました。

シベリアにおける活動を始めるに当たり、下記のように大体の受持ちが決められました。

トイスラー	医療
フェルプス	市民の生活救護
フレーザー	会計
ワーナー	一般的事務

各部所には、それぞれ数十人のアメリカ人、

ロシア人等が所属していました。何しろウラジオストクからシベリア全域（ロシア本国の一部を含めて）の広大な範囲に救護物資を分配し、また一方アメリカや日本から来る物資を受け入れるので、その仕事には非常に沢山の人手を要しました。ウラジオストクの海岸線に沿った目抜き通りの繁華街プシュキンスカヤ街の中央の大きなビルディングが米国赤十字社のウラジオストク本部で、その一階の広い部屋に数十人が机を並べて仕事をしていました。フェルプスは、汽車で遠く北方のブラゴエシュチェンスクに行きました。そこではチェコ人がロシアのボルシェビキと戦っていて、両方共医薬食物に乏しく、鎮痛剤消毒剤などは皆無で見ると悲惨な有様であったと報告しています。

4. シベリアにわたる救護事業

また、トイスラーは、東京、支那、朝鮮より、ミッション系の病院に働いている医師、看護婦等にウラジオストクの仕事に参加するよう呼びかけました。極東におけるそれらの医療関係の人々は、6か月の救護事業援助の求めに応じて、喜んでウラジオストクに来ました。前述のドクター・ローガンはこの中の一人でした。全シベリアにわたる救護事業には、膨大な人員が必要でした。これらの医療団は衣服もまちまちで、赤十字事業の規則にも理解が出来ていない状態でした。しかし、慣れない食物にも耐え、言葉

をはじめシベリアの住民との間に生じる様々な問題をよく克服し、その目的を完遂したのです。トイスラーは、事務本部をウラジオストクに置きましたが、広いシベリアの十数か所に、大小の病院、医療所を開設するため、または修繕、設備するため、寸暇を惜しんで東奔西走しました。この繁忙なる仕事に、彼は多くのサポートを必要としました。

事業の終りまでに設立された病院は下記のとおりでした。

医療列車はシベリア横断鉄道列車に設備し、

東京聖路加国際病院敷地内の基地病院	(約100床)
ウラジオストク・ロスキ島	(約250床)
ウラジオストク難民病院	(190床)
ニコルスリ・チフス病院	(200床)
ブチエズ結核病院	(110床)
トムスク大学医科大学病院	(200床)
イルクットスク病院	(250床)
ノヴォニコラエフスク・チフス病院	(275床)
オムスク病院	(1048床)
オムスク・チフス病院	(350床)
ソーメン病院	(260床)
ペトロパブロフスク・チフス病院	(300床)
チェリアピンスク病院	(1100床)
以上は開設後、間もなく事業終了時に閉鎖	
ヨーロッパ全線への汽車・客車の医療列車	(200床)
チフス治療キャンペーン	

米、英、仏、チェコその他の国の医師、看護婦によって運用されました。この医療列車の活動内容は、後日、フレーザー（前記、この赤十字救護班の会計担当）の語るところによれば次の様なものでした。「広範なこの地域に発疹チフスが大流行し、多くの死者が出ていました。トイスラーは機関車に続き、浄水タンク、運搬用貨車三台、熱湯及び蒸気発生のためのボイラー等からなる特別な列車をつくり、次に消毒器の貨車に続いて、患者が脱いだ衣服をすぐに消毒する機器を備えた客車、新しく消毒した衣類をのせた車両、これらを一連の列車として、都市を巡回しました。都市では、市民が集まり、列車が到着すると入浴し、古い汚れた衣服はすぐに消毒され、清潔な衣類に着かえるという方法がとられました。これは伝染病の予防、少なくとも蔓延防止に、大いに役立ったのです」。

トイスラーの救護班は、当初はウラジオストクと東シベリアの範囲で、ロスキ島の病院を中心に、主にチェコ兵士の救済を目的とする比較的小規模のものでした。しかし、仕事を進めるに従って、その活動範囲が徐々に拡大し、ついには全シベリア、ロシア本国にまで及んだのです。

一方、ロシアには、赤のボルシェビキ軍に対し、数十万に及ぶチェコ軍と白系ロシア軍（西シベリアのオムスクにコルチャク提督の下に白系政府が立てられた）との連合軍による戦闘が続いていました。米国赤十字社は主として、白系軍の救済に当たりました。その活動範囲が拡大されることにより、1918年の8月に、ワシントン政府の軍務委員長ヘンリー・ダビッドソンから、トイスラーに、シベリアの赤十字活動はワシントン政府の赤十字軍務委員の指揮下にあるという指令が電報で伝えられました。この

ために、シベリアの米国赤十字事業団の職員は陸軍附属となり、日本風にいえば軍属となり、別に、陸軍部隊が派遣されることとなったのです。そして赤十字のこれまでの事業は、一部陸軍部隊に肩代りされることとなりました。赤十字の仕事は、2つに分けられ、チェコ軍関係とアメリカ軍関係の2つになりました。

赤十字のほうは、戦闘にかかわらない救済の仕事に専念するものでした。そして、赤十字は軍隊の奉仕から、一般市民へのサービスへと広がりました。戦争も終局近くになると、参加各国の兵士も人々も、次第に困窮の状況となり、救助が待てない有様となっていました。特にロシアでは、内乱状態にあったので、一般国民の苦痛は悲惨でした。赤十字の仕事が病傷者救済から次第に難民救済へと転換していったことは自然なことでした。

1918年の7月23日に、ワシントンの赤十字本部から、トイスラーに「ウラジオストクとその附近の地区における救済全機構の統括と医療を担当して、市民、避難民救助を施すことは可能か」との趣旨の電報が来ました。トイスラーは、直ちに承諾しました。そして「ウラジオストクとその附近」はシベリアの先のウラル山脈を越えてロシア本国までひろげられたのです。

この事業は、従来遂行されたこの種の事業で世界中最も広い地域にわたり、その救済内容は実に行き届いたものでした。

トイスラー・フレーザー一行が初めてウラジオストクに来た頃のロシアの状態は、ボルシェビキが、モスクワとペトログラード（今のサンクトペテルブルグ）とその周辺を占拠し、チェ

コ人はシベリア鉄道に沿ってまばらに散在して、前線でボルシェビキと戦闘を交えましたが、住民からは不十分ながら物資給与を受けていました。

シベリアでの治安は悪化するばかりでした。ロシア全土は内乱に巻き込まれ、疾病飢餓に苦しむ人々に混ざってゲリラ戦が行われ、集団的暴力が横行していました。その中で西方のボルシェビキとシベリアの白系ロシアの暫定政府が絶えず戦闘を繰り返し、交通が麻痺している状態で、救護活動を行う事は想像を絶する困難を伴いました。

ウラジオストクや東部シベリアは割合平穏でしたが、西方のウラル山周辺は、前述のように混乱がひどく、トイスラーはかろうじて運行されているシベリア鉄道で、数千マイルのシベリアの広野を東奔西走しながら、病院の建設、難民への日常必需品配布等に気を配らなければなりませんでした。病院や看護関係は、主として、常に随伴していたミセス・セントジョンの助言に負う所が多くありました。

救護、救済事業について、終盤には、ロシアに散在していた数万のチェコ人の帰国をも援助する必要がありました。シベリアからウラジオストクに集結されたチェコ人は、海路地球の裏側を回り祖国に帰されました。

この赤十字救護の仕事は1918年の夏から最後の引きあげまで続けました。多くあった病院は、順次閉鎖され、その中の設備や救済物資は一般市民に役立つように現地の責任者に譲渡し、その他大部分は列車でウラジオストク方面に送られました。避難民のための仮設住宅も閉鎖さ

れ、医療関係者は、ウラジオストクに集結した後米国に帰されました。

ロスキ島の病院で働いていた我々聖路加の2つの医療団も、同年の12月初旬に日本に引きあげました。

我々は、シベリアで最高の季節とされる夏にウラジオストクに滞在して居たので、その期間は誠に快適でした。ロスキ島の中央は、海拔

200メートル前後の山で古い要塞があり、樹木が繁茂し、入り組んだ入江には、ロシア式の特徴ある教会が散在し、水は澄み、その景色は実に美しいものでした。シベリアの冬は早く、12月、日本へ帰る頃は、風は寒いというよりもむしろ痛いという程でした。海岸には数メートルの幅の氷が張りつめていましたが、船はまだ通っていました。

5.

帰 国

我々が滞在していた間で大変だったのが、世界的に大流行した流行性感冒で、半数以上の看護婦が一度に倒れたことでした。幸いに死者は出ませんでした。さらに大きな出来事は、11月に世界大戦の停戦が行われたことでした。そして、我々は日本への帰国が近いことを知りました。

東部シベリアへ駐屯していた米国軍も、1920年の春、全員帰国し、チェコ軍隊は、ウラジオストクから海路本国に帰されました。

トイスラー大佐（シベリアではカーネルと呼称）は、1919年の末に、一年半余にわたる精力的な大事業を終えました。一方、東京の聖路加国際病院では、彼の帰国を待ちわびていました。彼はシベリアの大救護事業の成果に、思い残すことが無い程まで充実した気持ちを持って日本へ帰ったのです。

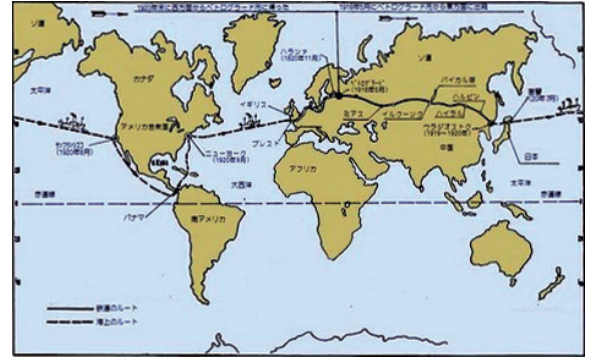
トイスラーのこの事業は、各方面から高く評価されました。1920年の1月に、統一ロシア政

府から、「ロシアの戦闘員並びに一般市民に対し、傷病者の治療、困窮者の救済のために、卓越した犠牲的活動をなした」功績により、セント・ウラジミール第四級勲章を授与されました。

また、チェコスロバキアからも、戦勲のメダルを受けました。アメリカの赤十字の中央委員長リビングストン・ファーランドは、シベリアにおける彼の事業と努力に感謝し、その成功を祝う手紙をトイスラーに送りました。

中でも彼が最も喜んだのは、赤十字本社会計部（accounting department）からの、短い文書でした。その内容は、この大戦から戦後にかけてアメリカ赤十字社から海外に派遣された事業団の中、シベリア派遣団は、事業の迅速・完遂、出納の正確性、機構の完全さにおいて、秀逸であったと記録されたという意味のものでした。

1919年と1920年に、ワシントンからシベリアの事業の監査員が送られましたが、それによると、アメリカ政府はこの複雑で広範な事業を快



写真、資料提供 NPO法人「人道の船 陽明丸顕彰会」

船体の側面にAMERICAN RED CROSSと書かれた陽明丸

難民の子供たちを乗せた陽明丸の航路

(追補 2)

築地の聖路加敷地内で行われていたチェコスロバキア兵士の治療

チェコスロバキアの傷病兵士100人余りをシベリアから船で敦賀、その後陸路で東京は明石町の聖路加敷地内（聖路加ガーデンの所）に連れてきて治療を行っていたことです。

このことは東京の基地病院として記録にはあ

りましたが、写真など具体的な資料はありませんでした。2016年チェコスロバキア研究者である早稲田大学長與進教授※からチェコのプラハ博物館に保存されている写真のご提示を頂きました。驚くことにそこにはシベリア救護班メンバーの当院ナースの写真や聖路加敷地内で撮影されたチェコスロバキアの兵士たちとナース達の写真が有ったのです。



治療の為に来日したチェコの兵士たちと聖路加のナース

※長與進教授の祖父長與又郎博士（東京帝国大学教授）は、聖路加の評議員であり、トイスラー逝去後、遺体をモーニング姿の礼装で剖検した。

第7章 理想

1. 新病院の計画

トイスラーが、国際的な大病院建設の計画を持ったのは、1907年に、東京で国際博覧会が開催されることが決定し、それにより各国との交流が盛んになることが予想されたからでした。大会開催中、世界中から集まる来日者への対応、特に彼らの疾病や外傷への治療及び入院に対して、外国人を満足させるような病院は皆無とあって良いほど存在していなかったのです。トイスラーは、このような病院を創設運営できるのは自分を置いては他にないと考えました。そして、その規模は約200床の病院とする案が作られたのです。

結局、この博覧会は、1912年の明治天皇崩御のため中止となりましたが、このことによりトイスラーという有能な米国人医師の存在が日本の政財界の重鎮たちの知る所となり、その後の彼の事業に多くの便宜となりました。彼は博覧会を契機として、国際的な大病院を作る確固たる決意・自信を持つに至ったのです。

1913年に新しく拡張された聖路加国際病院のおおよその設計を発表しました。それは、各診療科の外来診察室の設備、病室とその附属設備

を説明付きで表した青写真でした。その土地と建築・設備等の合計予算は48万5千ドルと見積られました。しかし、この設計案は、一時に全部を完成する必要はないのでその中の必要不可欠と思われる部分が記載されていました。土地と自費患者用の病棟2つ、看護婦宿舎及び厨房食堂等日用サービス一棟の建物等が必要としてあげられていました。

日本での募金のみでは到底足りず、トイスラーは米国に渡り、1913年の米国聖公会の総会で承認を得て、米国内での聖路加病院建設募金活動を大々的に始めました。1914年の春には25万ドルの寄付が集り、その3年後には44万ドルに達しました。

しかし、1918年には、米国赤十字シベリア救護班派遣のため彼はシベリアに渡ったので、募金活動は約3年中止されました。彼は1920年東京に戻り、中止となっていた募金活動に取りかかりました。

1914年に、新病院建設に最適の土地を手に入る話がまとまりました。これは当時の病院の隣接地で彼の目的に適した、願ってもない土地

でした(現 聖路加ガーデンのブロック)。この場所には、かつて米国公使館があり、その記念として東側の塀近くに1メートル立方程の大石に米国の紋章を刻印したものが現存していました。その土地は隅田川沿いの約4千5百坪(1万3千5百平方メートル)の広さでした。その後この土地の南側には5階建ての看護婦寄宿舎(1958年8月完成)が建ち、並びに病院職員用家屋とトイスラー記念館が建ちましたが、大部分は芝生と美しい花樹のうわった庭園となりました。米国の公使館があったのは、明治の初期であったと想像されますが、そこが如何に

して日本人の手に渡ったかはわかりません。トイスラーがこの土地を購入したのは、松下軍治という裕福な弁護士からであったことは確かですが、松下はこの土地に立派な西洋風の二階建ての住宅を持っていたのです。トイスラーは、この広い住宅を開設当初(1920年)の看護婦学校用の教室と校長ミセス・セントジョンの住居とにあてていました。

こうして、四方を道路に囲まれた大きな1ブロックの広い敷地が聖路加のものとなりました。購入価格は49万円であったと聞いています。この話は、関東大震災の数年前のことです。

2. 看護婦学校の設立へ

1917年(大正6)に、全日本看護婦協会から、トイスラーが計画している新病院に、キリスト教の精神に基づく看護婦養成学校と寄宿舎を作るプランを加えて欲しいとの要請がトイスラーに届きました。全日本看護婦協会の意図するところは、地方の看護婦団体(あるいは協会)から、複数の看護婦を選び、聖路加病院の学校に入れ、1年間の卒業後に訓練(ポストグラデュエート)を受けさせ、その後、出身病院に戻って看護婦指導を行わせるというものでした。

トイスラーは、この申し出を非常に喜びました。しかし、彼はこの申し出以上の看護教育プログラムを既に計画していました。そして目的にかなう責任者として、米国において、ミセス・アリス・C・セントジョンを任命していました。

1918年ミセス・セントジョンは、トイスラーの招聘に応じて米国を出発しました。しかし、東京に着くとすぐに米国赤十字シベリア救護班に加わることになり、ウラジオストクに赴いて、その仕事に参加することとなりました。

彼女は1年に及ぶ救護班活動の後、東京に帰り、聖路加国際病院附属高等看護婦学校の校長の任務につきました。

前述の新しく手に入れた隅田川沿いの土地に、レンガ作りの大きな家屋があり、これが米国赤十字救護班活動の日本における基地病院(ベース・ホスピタル)で、チェコスロバキア傷病兵用の専用病棟として役立っていましたが、その用途はすでに終わっていたので、看護婦学校に改築され、教室および寄宿舎にあてられ

ました。また、前所有者の住宅であった日本家は、卒業生等看護婦の寄宿舎になりました。

この看護婦学校は、その生徒の学歴と教科レベルの高さにおいて、従来の日本の看護婦養成学校に比して、革命的ともいえる程進んだものでした。

先ず、入学志願者は高等女学校卒業の資格が必要とされました。それまでの日本では看護婦には、高等小学校卒業で十分とされていました。トイスラーの友人で、学校評議員の多くの有識婦人たちは、入学資格に高等女学校卒業を要求することは無理であり、失敗に終るだろうと、その資格を下げることを進言しましたが、トイスラーは、頑として自分の主張を曲げ

ませんでした。日本の看護婦の教養と社会的地位を、アメリカ並みに高くするという、トイスラーとミセス・セントジョンの理想のためには、入学志願者への資格要件は、最重要点で、彼等は、小学校卒業資格だけでは不十分であると主張したのです。

実際に、1920年の10月、学生募集に応じた高等女学校卒業生の数は80名でした。その中25名の入学を許可して、学校の事業は開始しました。これは日本の看護教育史において1つの画期的出来事であったといえるでしょう。

看護婦学校開設の問題がひと段落したので、彼は新病院建設に専念することができました。

3. 新病院建設へ

当初（1913年）の病院建設の想定総費用は48万5千ドルでした。その後、シベリア救護班での彼の経験を生かして、その計画は1922年には、その2倍と設定されました。その額の寄付を米国に要請しましたが、その結果は思わしくありませんでした。遂に彼は待ちきれず、手持ちの資金で工事に着手することに踏み切ったのです。

その計画は念入りに数年の考慮を経たものでボストンの建築家、米国および極東にいる病院建築の専門家数人の意見を参考にしました。1921年に、ジョン・D・ロックフェラー、ドクター・ピアスその他数人の視察団が北京へ行く途中、東京に立寄り、聖路加を視察しましたが

その中の一人、米国の病院建築の第一人者であったドクター・ゴールドウォーターは、ロックフェラー団長の承諾を得て、一人残って、三日間トイスラーからその計画について説明を聞いたのです。このゴールドウォーターの意見は、病院設計を考えるうえで非常に参考となったとトイスラーは報告しています。

1922年の秋、トイスラーと副院長久保徳太郎は、北京のユニオン・メディカルカレッジ（米国ロックフェラー財団設立運営の北京医科大学）からの招待に応じて、1か月間、北京に行きました。

東京に帰ってから、トイスラーは、北京大学

の医療教育部長のドクトル・ピアスに、北京大学の視察で、実際に稼働している組織を詳しく見させていただく事が、聖路加の新病院設計に非常に参考となり収穫が有りましたと手紙に書いています。また、北京医科大学（ユニオン・メデイカル・カレッジ）の建築家C・W・アンナーに聖路加新病院の設計図を送り助言を依頼しました。折返してアンナーから、北京の大学の青写真が来ました。また、アンナー自身、東京に来て色々助言してくれたのです。

このように設計は慎重に、多くのエキスパートの意見を取り入れて、東京にあるアメリカの建設会社によって最終的に完成され、建設はその会社に任されました。

1922～1923年の冬、トイスラーは南満洲に行っていました。満州人の衛生状態を視察する目的でした。そしてその報告を、ニューヨークのロックフェラー財団の国際衛生部長、ドクタ・ビクター・C・ヘイザーに提出しましたが、その報告の送り状には次の申し訳がしてありました。視察期間が短く言語上の問題もあって、正確及び広範であるべき報告が80パーセント位のものでしかないと断ってありました。

彼が日本へ戻ってきた時は、すでに、新病院の工事は始まっていました。彼はまた費用超過を見込んで寄付の募集を始めようとしていました。丁度その時、当時東京市長であった後藤新平から市内に乳児保育と産前産後の診療と指導が出来るクリニックを2か所開いてほしいとの要請があったのです。

この事は聖路加に、社会福祉事業に対応するだけの力とやる気があることを容認したもの

で、大いに喜ぶべきことでした。トイスラー院長は、市内の住宅地区に2か所、そして病院の外来部門にそのクリニックを設けました。

1923年の4月には、ロックフェラー財団の秘書エンブリーに出した手紙に建設はすでに始まっており、10年待った後に、建設のためのコンクリート・ミキサーの音を聞くのはまるで音楽を聞いている程に楽しいと書いてありました。そしてその手紙に、病院の企画プランを大きくし、病室、手術室のユニットその他の数を増すことを書いたのです。

その年の5月初めに、彼はまた米国に渡りました。それは予定された最新の病院設計の石膏模型を持参し、ニューヨークの聖公会本部にある古い模型と交換するための渡米でした。

このモデルは精巧に非常に労力をかけて作られ、周囲の庭には原色の樹木の模型が植えつけられ芸術品といえる程の出来でした。トイスラーは立派な芸術品としてこれを大切にし、ニューヨークの教会本部迄安全に運ぶのに大変な苦労をしました。ニューヨークまではことなきを得て無難に運びましたが、中央駅からは、大きなオーブントラックをようやく探しあて、その模型を入れた箱が落ちないようにトイスラーと娘さんが一緒に乗って手でそれを支えて教会本部まで届けたというエピソードが残っています。



(南東側)



(北西側)

1923年 関東大震災前に隅田川沿いの土地に計画された新病院プランの模型

第8章 関東大震災

1. 震災の記録

1923（大正12）年9月1日（土曜日）、午前11時58分に、東京、横浜、鎌倉とその周辺地区に大地震が発生しました。震度6～7という歴史上まれに見る強い地震で、年寄りの話によると、1855年の安政江戸地震以来の強い揺れであったといえます。地震による死亡（当時の新聞によると死傷者、東京都：7万人、神奈川県：3万3千人）や倒壊家屋があった事は言うまでもなく、損害は地震よりも火災による被害が、それはひどいものだったのです。横浜は全市が焼失しました。東京は、本郷、小石川、牛込、赤坂、麻布を除いて他は全部、一軒も残す所なく焼失しました。死亡は、焼死、溺死等十数万といわれました。最も悲惨だったのは、本所の陸軍省被服廠跡の空地に集まった3～4万人の避難者が全滅に近い程、焼死した事でした。燃えやすいタンスや衣服を持ち込んだため、それに火がついて益々火が激しくなったのです。この空地の周辺は火の海となり、隅田川に飛び込んで溺れた人もいましたが、大部分の人は焼死しました。ここには1～2年たって震災記念堂が建ち、その後第二次世界大戦による東京大空

襲の戦災者も納骨され、1951年からは東京都慰霊堂と改称され、毎年供養が行われています。

下町の全部、山の手のある部分は、すべて焦土と化し、建っている家は1軒もなかったと言っても過言ではありません。

聖路加国際病院も全部破壊され、一瞬にして木材、壁、泥の無秩序の残骸となってしまいました。その木材などは、後に発生した火災によって灰となりました。付近にあった立教女学校、聖三一大聖堂、立教中学校、三一神学校、三一会館等も同様に皆灰燼と化したのです。

2.

震災当日の聖路加の様子

激震のショックの時の模様は、当時の婦長の話によると次の様でした。11時58分に激しい上下動を感じ、各室内の器物は次々に床にころげ落ち、看護婦は直ちに窓をあけ、ガスの元栓をしめ声の限りに叫びながら下のホールに避難しようとしたが、階段等の床板が割れたため歩くことができなくなりました。轟音と大混乱の中で、嚴重に固定された什器、医療器具までその固定部から離れ、あるいは固定部ごと落下し、建物全体が大きい音をたてて、無数の亀裂を生じて傾斜しました、しかし、勤務中の職員、主として看護婦たちは極めて沈着に自分の危険を顧みず、その勤めを果たしました。

患者には、最初の震動が止むまでの約6分間ベッドの下に入って、地震の合間に逃げるように指示しました。次の余震が来る前に患者をこの建物の外に逃げるように指示したのです。担架あるいは畳にのせ、ある者は背負って、歩行可能な者は付き添って外に出しました。

婦長は地面が割れているのを見た時ほど、恐ろしかったことはなかったとしみじみ語っています。

その時の有様は、トイスラーが帰国後書いた手紙によく現われています。看護婦の中で1人もその持ち場を離れた者はありませんでした。満床だった80人の患者は、全員15分以内に院外の安全な場所に移され、運送中も1人として患者は事故による外傷を受けませんでした。このことは全家屋破壊のため建物全体の階段や、廊

下が破壊され足元も危険にさらされ、やっと壁の手すりにつかまって通り抜けた状況を考えると、その勤務に対する責任感と苦勞の程が一層しのばれるのです。

トイスラーは、なおも続けます。この震災における病院看護婦その他のスタッフの態度は実に立派であった。1人の犠牲者も出ませんでした。目撃者はそれら看護婦の行為は、実に勇敢、偉大であったとほめたたえています。

病院から避難した患者は、川沿いの新病院予定地（現 聖路加ガーデン）の北部にあった基礎工事の中に移されました。避難場所で使用する毛布、シーツ、マット等は、医師看護婦等により壊れた病院から運びだして、患者を寝かすことができました。これは、絶え間なく来る余震で病院が益々打ち壊され、中に入ることができなくなるまで続けられました。同様に料理方や薬局責任者も危険を顧みず、患者の為に、ある限りの食物、材料、料理器具、薬品を運び出しました。避難した土地は広い空地であったため、月島などから避難して来る者も多く、その中には傷病人もあり、持ち出した薬品が大いに役立ちました。

地震は、発生当日だけで356回の余震があったと中央气象台が発表したくらい、頻繁に起きましたが、翌日の日曜日には徐々に収まりました。

火事は最初の地震から6～7時間後、当日の夕方に始まりました。1軒の家から出火したと思うと、すぐに家全体が炎に包まれ、次には隣

の家に延焼するという早い広がり方で、消火手段の無い人々は、ただ茫然と見ているだけでした。

一旦、この病院の空地に避難した患者も、郊外の持家に移る者や、親類が引き取る者が大分あって、看護や食事の世話の必要な人たちは、徐々に減っていきました。同時に、医師もその家族のために帰宅する人がいて、残された医師、看護婦はかえって忙しくなりました。そして、地震以上に火事の危険に晒されましたが、幸いにも土地が広く、火災や火の粉をさける患者を空地内の安全な場所に移動させることが出来ました。その猛火は火の粉とか燃焼した木片の雨が降るといようなものではなく、火災の大きな膜がおそいかかるといほどのすごい火の塊が、この全地面を通過して隅田川をわたり月島を焼いたのです。（ビショップ・ライフスナイダーの話）建設中の新病院基礎工事は、地面か

らは低くなっているのです、火災を避けるには幾分、好都合でした。

火災が盛んになってから4時間程は、看護婦等は、患者の傍に寄り添って交替で、ふとんに水溜りの水をかけて、患者を火災やもえる木片から守りました。降るように落ちてくる火の粉、焼けた木片を附近のポプラの枝を切って水にぬらしたもので払いのけるのは大変な作業でした。看護婦や使用人等は、患者を背負って、隅田川につかって火熱の難を避けました。川はすでに多くの避難者で埋め尽くされ、中には川中の深みに流されて溺れる者さえあったのです。

ある冷静な医師が他から来る避難者に家財道具の持ち込みを一切禁じたので、この場所では火災は起らず、本所被服廠のような残酷な災害にならなかったことは幸運でした。

3.

震災後

2日後の月曜日の早朝、津波が来るという噂で海に近い築地の人々は恐怖に怯えましたが、何事ありませんでした。火災はやや下火になり車が通れるようになったので、医師、看護婦を付添わせて病院専用車に患者を詰め込み、皇居前広場の芝生に移動しました。ここも数千人の避難者で混雑していました。ここで土曜日の朝、軽井沢に行っていた病院監督（久保副院長か？）に会いました。彼は直ちに今後の対応について指示を出しました。山手の火災地域の外

側にある青山学院から寄宿舍の空いていた2室を借りて患者が使用出来るよう話をつけ、疲労困憊していた患者を、青山学院に運んだのです。このことは患者に非常に喜ばれました。

病院職員として最も嬉しく思ったことは、このような極限状態に有りながら全員が団結し固い結束力で共同作業を成し遂げた事です。

翌日早朝、職員の1人は、現状報告のために軽井沢のマキム主教のもとに走りました。混乱の中の旅行は、想像以上に大変でしたが、彼は

24時間かかって軽井沢に着きその使命を果たしました。ハウスキーパーは、市内の友人のもとを駆け廻って患者の衣服を調達し、当座の衣類を手に入れました。自動車運転手は焼け残った市内をまわってガソリンを少しずつ集めてタンクを満たし、患者の搬送に役立てました。

月曜日の夜、青山学院寄宿舎広間に、スタッフ125人が集まり今直面している大きな問題、つまり今後病院をどうすべきかを討議しました。トイスラー院長は在米、マキム主教は軽井沢、我々全員が全責任を負って対応しなければなりません。残念ながら、誰も回答を持ちあわせていませんでした。

病院は無くなりました。我々が働くべき場所は、もうないのです。現職員や組織を継続していくべきか、そうであればどうしたらそれが出来るのか。または一時解散して病院の復興を待って再び集合するのか、意見はまちまちでした。しかし、最終的には、今後遭遇する困難を覚悟の上で、病院を継続するという意見に落ちついたのです。我々は、トイスラー院長が決してこの事業を捨てないという点で一致し、確信を持っていました。そして、その結論に基づいて、今後の方針を定め、病院が1つの組織として、市や政府の救済事業に加わることを決めました。大方針は決まりましたが次の問題は物資

調達の問題でした。手持ちの味噌、大根、米等1日2食に減らしても限られた日数を賄う分量しかありません。衣類もまた必要です。各職員の持ち合せの金を集めても、そんな金では、どうにもなりません。しかし、捨てる神あれば拾う神ありで、医師等が持ち合せを集めているところにコック長が現われ、大枚2百円を寄付しました。またこのコック長は軽井沢の近くの親類から必要な食材を集めて来ることを申し出て軽井沢に走ったのです。このことは、一時困窮にあった皆を救い、同時に志気を引き立てるのに大きく貢献しました。更に嬉しいことに、病院の焼けあとにあった金庫から黒こげになった3千6百余円の札束が出てきた事です。これを日本銀行に持って行って、現金で同額のお金を受取ったのです。このお金がどんなにか重要な役割を果たしたかは言うまでもないでしょう。

軽井沢に行っていた病院の監督は、マキム主教から職員が病院継続のための活動を推し進めることを承認するという返答を持って帰ってきました。料理長は信州から食材を信用買いして荷車一杯持って来ました。看護婦の制服その他衣類は、軽井沢のある婦人団体が縫製し、車で送って来ました。

4. 復興に向けて

病院のスタッフは方針が定まると直ちに事業

にとりかかりました。東京市と政府の救済事業

への協力を申込むとすぐ受入れられ、直ちに青山学院内の病院の仮施設に、火傷者や病人が送られてきました。

救済事業を開始して間もなく、このことを耳にされた皇后陛下がお見舞いに足を運ばれ、多額の御手許金を御下賜になりました。皇后の前には伏見宮殿下同妃殿下も、病院に足を運ばれ、多額の御下賜をされました。これらのことは職員一同を大いに鼓舞しましたが元を正せばトイスラーの日本における人望と事業に対する高い評価がもたらした結果だったと言えるでしょう。

米国に居たトイスラーは、家族とともにニューハンプシャーで夏休みを過ごし、8月に

募金の目的でニューヨークに帰りました。9月2日（日曜日）の早朝、彼は娘のメリー・スチュアートからの電話で、東京、横浜の大災害を聞き、すぐ、娘と共にアソシエーテッド・プレス事務室に行って情報を集めました。

日本からは、東京の北230キロメートルも離れた名も知らないラジオ放送局から、細々と情報が流れ来るのみでした。その後、数日は、報道がとだえました。次の水曜日にマキム主教からニューヨークの聖公会本部に、「教会、学校住宅皆焼失した。人命の損失なし」という電報が来ました。

5. トイスラー東京に帰る

震災から3週間後、彼は東京へ出立しました。東京が焦土と化し、病院が全倒壊焼失したことは、あらかたの情報が米国にも届いていた為、当座の救援物資や患者用の必需品等寄贈を米国赤十字や一般市民にお願いし、缶詰、リネン、家具等、膨大な品を入手して、震災発生のか月後、10月5日に豪雨の中を横浜港に到着しました。船が港にはいる時、甲板に立ち、横浜の山手や見覚えのある家や町が全部灰塵と化したのを眺めて、感涙にむせびました。上陸し、米国総領事ネルソン・ジョンソンに会い、最初に発した言葉は、「どのようにしたらこの大量の物資を有効に用いられるでしょう」でした。

彼は、波止場で病院からの使者に会いました。

この頃はもうすでに東京横浜間の公道は回復し自動車が通行するまでになっていました。

途中、目にする想像をこえた荒廃の町を見て驚きを隠せませんでした。病院の周辺は完全に破壊しつくされ、荒涼と沈うつ空気が漂っていました。只1つ建っていた家は、新しい病院の予定地の上に2年前に建てられた木造の小さい2階家の仮設建築事務所のみでした。彼は初めて震災時の模様を当事者や目撃者から聞きました。彼の不在中、医師、看護婦その他の職員がいかに勇敢にかつ忠実にその義務を遂行したかを知りました。

トイスラーは米国で東京大震災による大破壊のニュースを耳にするとすぐに、ワシントンの



天幕病院 待合室



天幕病院 笑顔の看護婦たち

赤十字社本部に駆けつけ、東京での赤十字救済活動（の奉仕）を行いたいと申し出ました。そして陸軍の野戦病院設置機械一式を聖路加国際病院に復興できるまで貸与してほしいと願い出ました。しかし陸軍卿は不在であって、早急には対応が出来ません。幸いにも彼はかねて知り合いのパーシング将軍（数年前東京の米国大使館付武官であり、トイスラーと友人関係であった。その息子は聖路加国際病院で生れ、パーシング自身も入院したことがある）に会い、このことを頼みました。パーシングは陸軍卿不在の時は、その代理を行う地位にあった為、すぐトイスラーの希望することにサインをしてくれました。トイスラーが東京に帰って来た時には、パーシングの命令により、マニラから軍艦により送られた「米国政府医務庁野戦病院」が建っていたのです。

この野戦病院は、病院敷地の東側現看護大学の敷地の大部分を占める場所（現 大学本館、病院旧館、トイスラー記念館のある敷地の大部分を占める場所）に数十張の米国の濃褐色の大きなテントを建てたものでした。テントの中には医療施設のすべて、手術室からX線器械まで整っており、検査室もありました。実験用の動物（モルモット）が居なかった他は、病院機能の全てが十分な装備でした。この場所は、被災する前は立教中学校、三一神学校、聖職の住居等がありましたが焼失して荒地になっていた場所でした。

トイスラーが帰京して10日後、青山学院寄宿舍に臨時に収容されていた患者が、このテント病院に移されました。薬品、メス、ナイフ、検温器まで米国から提供されたものですぐに本格的な診療に取りかかりました。

6.

仮病院

しかし、間もなく冬を迎えるので、木造バラッ

クの仮病院を、震災前に聖路加国際病院があっ



関東大震災後に建てられた仮病院

た場所〔そこには立教女学校、聖三一大聖堂、マキム主教宅、田川幾造宅（聖三一大聖堂主任牧師）、小林彦五郎宅（立教女学校々長）などの住宅があった〕に建てることを決定しました。この建設のため、内務省から1万5千円と大量の建築材料の材木が、また、東京市からも同じく大量の木材と施療患者用のバラックの家が寄贈されました。これらすべての援助は、築地地区の復興計画にも一役を担っていました。

バラック仮病院の建築中は、医師、看護婦の多数はトイスラー院長と共にテント病院に寝起きし、そして5か月間ほどは、マキム主教はじめ一同粗末な衣服をまとめて復興を目指して働きました。翌1924年の6月1日に新しい木造二階建てのバラック仮病院が出来上がりました。これは、長さ約45メートルで、幅6～7メートル、総2階で、1階2階共中央に南から北へ廊下が貫いており、患者を2階（病室及び手術場等）に上げるために、東側に運搬車がらくに通れる傾斜道がつけてありました。1階は事務と外来診療にあてられ、X線室もあり、2階は病室が主でした。収容患者はざっと40人から50人位でした。これで一応、病院らしい形となり、

やや完全に近い治療ができると一同大いに喜びました。震災直後、病院の存続が心配された時に比べ、これで病院の復興が達成できることが確実になって、皆働く意欲に燃えました。この2階建てバラック仮病院は、木造旧館の北西部の旧館玄関あたりまで、東側は旧館のボイラーのあたりまでの場所に（現 救命救急センターからオンコロジーセンター前までの場所）建てられました。

トイスラーの早期復興への努力は、日本側に多大な反響を巻き起こし、内務大臣後藤新平は、トイスラーとそのスタッフが震災直後に救急病院を速かに設置し、東京市民を救助したことに對し感謝状をトイスラーに送りました。復興担当総裁であった内務大臣後藤新平は復興の顧問として米国からC・A・ビヤード（Beard）博士を招請していました。そのビヤード博士のトイスラー宛の手紙に、「後藤は総理大臣以下閣僚の合意の上で、また彼の権限に於いて、トイスラーに聖路加国際病院再建を要請することになった。これはあなたの日本での尽力が国家によって認められた証である。それは同時にあなたへの名誉でもある。お目出とう」とありました。

大隈総理大臣は「聖路加国際病院は我々社会にとって無くてはならない組織である。その再建に我々は適切な援助をしなければならない」と言いました。また大臣は日本救急援護会の代表数人とともに1924年の3月、病院を視察に来了ました。その結果その援護会から2万5千円（1万2千5百ドル）の寄付がありました。トイスラーは、これは聖路加の事業が社会に高く評価されたしるしで、金額以上に喜ばしいこと

であるという喜びました。それまで民間病院でこのような寄付を受けた病院は他にありませんでした。

米国々務卿C・H・ヒュース(Hiughes)から、ワシントンのフリーマン監督を通してトイスラーに次のような手紙が届きました。

「東京の聖路加国際病院の再建に努力されることを甚だ喜ばしく思う。あなたの仕事は米国の医学貢献の進歩を現すものと同時に、日本国民との心からの親善関係を促進するものであります」

1923年の12月初旬、ゲーラ主教とドクター・ウッドが来日し、病院の現状と将来について、マキム主教、ミッションのスタッフ、日本の主たる官界の人々と5週間にわたって協議しました。この2人の報告に基づいて1924年の2月20日の聖公会全米委員会は全会一致でそれを承認し、再建費用全額2百40万ドルを可決し、その支出を全教会に求めるため、牧師信徒の委員を任命しました。ウィリアム・クーパー・プロクター大佐が、再建資金募集委員長となり、トイスラーは全精力を傾けて募金活動を行いました。しかし彼は委員会の席上、聖路加再建の資金を第一に主張せず、聖路加のために割り当てられると思われる資金を緊急に必要と迫られている立教大学にまわす案に賛成しました。

1924年の5月、彼はニューヨークのWJZ放送局から震災後の日本の状況を説明し、米国民の同情と理解に訴え、日本国民に米国民の好意を真に伝えられるように、あらゆる努力をして理解と支持を示すように求めました。

トイスラーが帰米中、1925年1月30日に次の

災難が起きました。彼が「第二の火の洗礼」と名づけた、前年新築したばかりのバラック仮病院の全焼でした。前述したように、2階も1階も北から南へ貫く長い廊下が通り、その両側に病室や各施設が並んでいました。かなり強い北風が吹き、火は2階の北端の一室から出ました。原因は不明ですが、火のまわりが早く燃え広がる条件が皆そろっていました。私(中村徳吉)はその時他の場所にいましたが、聖路加が火事だという知らせを聞いて3〜40分後につけた時は、病院はすでに全焼し終えた後でした。

この火事の時も職員、看護婦の落ち着いた勇気ある対応によって、出火30分以内に全患者(その内5人は外国人)を安全な場所に移しました。幸いな事に1人の外傷者も出さずに済みました。

病院の2度目の火災は、世間の一方ならぬ同情を集めました。付近の食料店からは種々の品が届けられ、この地区の有力な医師は、患者の世話を申し出ました。渋沢栄一子爵はまだ延焼中の病院に社員を派遣して、緊急に必要な援助をすると申し出られました。また、聖路加で世話になったという著名な歌舞伎役者数名からは、診療が継続できるようにと興業の売り上げの一部が寄付されました。帝国ホテルも火事が終らないうちに、早くもバレンタイン・ダンスパーティーの収入を病院の復興資金に寄付すると発表しました。英字新聞ジャパントゥタイムズは、病院の火災を報じ、帝国ホテルのバレンタイン・ダンスパーティーに行って、心のこもった義援金に協力するよう呼びかけました。

ニューヨークに居たトイスラーは火災の報告を受けてすぐに「病院はすぐ建てる、しかし本

格的・永久的なものを建てるとすると、少なくとも2年は待たねばならないが、今はそれまで待つ訳にはいかない」と言いました。

幸いにも病院建物は火災保険に加入していました。その保障額は25万円で、2月末頃には新しい木造病院の再建設が始まり、5月には施設を使用することができるようになりました。この新しい木造病院は、我々が旧館と言っていたもので、20年後、日米戦争の空襲にも焼かれず（米軍は空襲によって東京を全滅させたが、聖路加国際病院とその周辺は攻撃しなかった）古くなくても長期にわたり役立っていました。こ

の新しい木造病院はその前の仮病院より2倍以上大きく、一部は2階建てで正面に外来診察室・事務・薬局・院長室等の長い1舎と、その後に2舎、3舎は病室、4舎は手術室・X線室・病室、8舎、9舎は男女別の大部屋となっていました。X線機器は新しく米国フィラデルフィア救急委員を通して、トイスラーが手に入れた最新式のものでした。この病院には暖房が備えつけられました。

トイスラーが日本に帰って募金活動の成果を待っている間に、ペンシルバニア教区でさらに25万ドルの寄付がありました。

第9章

聖路加メヂカル・センター

1. メヂカル・センター構想

1926年トイスラーが米国から日本に戻ると、私達病院職員は、病院は今までの単なる病院でなく、ホスピタル・センターあるいはメヂカル・センターと呼ばれるものに向って進みつつあることを知りました。トイスラーの言うところの、このホスピタル（あるいはメヂカル）センターとは「質の高い治療の提供、看護婦の教育訓練、若い医師の卒後教育、家庭訪問による医療と保健指導及び社会奉仕、学校衛生への参加、病院スタッフ間のチームワークなどを行う施設」でした。

この頃、彼がピッツバーグのA・V・デービスに送った手紙にはこのメヂカル・センターの仕事は一部すでに実行していると書いてあります。しかし、このメヂカル・センターの病院名は木造病院にはまだ用いられませんでした。ただ、メヂカル・センター構想の一部としてすでに看護婦学校は始められ進行していました。また、東京市の要請を受けて29床の産院を開設し、病院の産科医と看護婦の管理下におきました。孤児の為に24床の収容室を作りました。市と病院は協定を交わし、費用は市が負担、医師・看

護婦は聖路加からの出向という形がとられました。その場所は隅田川沿いのガーデンの北側、道路を挟んだ北側にある病院の所有地でした。

この産院は同時に産婆訓練所でもありました。市から産婆学の学説課程を終了した生徒をここに入れ、6か月間の厳しい実地訓練を行い、卒業後は開業の産婆にあるいは施設の実地指導者となる実力を十分に兼ね備えさせるものでした。またこの産院の一部は震災被害者の産婦へのサービスにあてられました。

1925年の11月、市の教育局の指示のもと、日本で初めての学童衛生施設が院内に作られました。

この頃から公衆衛生事業は病院の正規の事業として大きく発展してきました。1928年2月11日（紀元節の日）当時はまだ病院の記念日でもあったので、この日を記念して病院の一部門として公衆衛生部が正式に創立され、その部長に斎藤潔が任命されました。斎藤潔はロックフェラー財団のスカラーシップを受けて渡米、2年間公衆衛生学を研究して帰ってきた人でした（1956年国立公衆衛生院長となり、1966年11月3日勲二等旭日重光章を授与された）。

トイスラーはまた病院設備に不可欠な存在として立派な礼拝堂を院内に設けました。さらに彼は、第一次世界大戦後、著しく進歩した米英の医学が、将来ドイツ医学に代わって日本の主流となる時代が来ることを予測し、米国の医学書雑誌を収集した大きな図書室を作って医師・看護婦の勉学に役立てました。トイスラーの先見の明に感嘆せざるを得ません。

耐火永久建築の新病院は前述したように多くの医師や米国一流の建築技師の粋を集めたプランによって震災前に着手されましたが、基礎工事の時点で中止され、それから2ブロック西の立教中学校や神学校等のあった、焦土化したブロック（現 大学本館及び旧館が建っている第1街区）に新たに建てられることに変更されました。病院設計はトイスラーが精根をつくし何回もプランを書き換え、多数のエキスパートの考えを取り入れて作られた最終的なものが広い更

地のこの地に建てられることになったのでした。

トイスラーはまた、群馬県草津の癩患者療養所を訪問してミス・メリー・コーンウォール・リー所長の博愛献身の事業に感銘し、癩病院建築のため多くの進言を与えました。また1924年彼は大阪のバルナバ病院に関し、聖公会全国協議会の依頼によりその運営方針について助言する目的で現状調査を行いました。その結果、トイスラーは一般の病院ではなく産科と小児科業務を行い少なくとも3年間その実践及び教育センターとして試験的運用を助言しました。その提案は病院が赤字経営に陥らない程度に寄付を募るという条件のもと、協議会に受け入れられたのです。翌年、彼はバルナバ病院の院長に任命されました。その計画の為に資金は無事確保され、すぐにバルナバ病院内に小児保健センターが設立され、1928年6月、病院は本格的に再開する事ができたのです。

2. 聖路加女子専門学校

1927年11月、文部省から聖路加国際病院附属高等看護婦学校に専門学校の許可が下り、学校は聖路加女子専門学校となりました。文部省はこれまでこの種の学校に専門学校の資格を与えたことはありませんでした。聖路加看護婦学校の高い水準と完備した設備、行き届いた訓練が政府から認められ日本で最初の看護婦の専門学校となったのです。

聖路加国際病院の看護婦教育の評価は、日本

国内はもとよりアメリカにも広く知られるようになりました。川崎造船所の社長で文部大臣を歴任した平生汎三郎が神戸と大阪の中間地点に甲南病院を建設し、聖路加国際病院のような国際的病院を目指しました。そして特に看護婦婦長等首脳部は聖路加女子専門学校卒業生から採用し、また150名の中から選出された18名の甲南病院看護婦を聖路加国際病院で訓練を受けさせました。トイスラーは平生のこの計画に協力

し、その実行に十分な便宜を計りました。

ニューヨークのロックフェラー財団は聖路加国際病院の看護の優秀さを認め、看護婦長荒木いよ他3名を招待し、米国の進んだ看護法を視察修得する機会を与えました。そして同財団は聖路加女子専門学校に5年間、1年につき1万ドルの寄付を行ったのです。

聖路加メヂカル・センターの建設の許可願は警視庁および内務省へまわされ、検討された結果許可が下りました。建設会社（清水建設）との契約もまとまりました。そして1928年2月11

日（前から病院の記念日とされていた）に地割式が行われました。この日は寒く地面には少し雪が残っていました。現在病院が建っている場所（現 大学本館及び旧館が建っている第1街区）に広く TENT を張り、著名な人々が多く参加しました。式はライフスナイダー主教とその他数名の聖職者によって司式が行われ、スぺード（シャベル）で土を掘り終了しました。

この時に用いたスぺードは、関東大震災直後パーシング将軍がマニラから送った野戦病院一式の装備の中にあった12本のうちの1本でした。

3. メヂカル・センター構想の実現

1928年3月にトイスラーは固い決意を持って病院拡大計画の募金活動のため米国に旅立ちました。

米国聖公会の事務局長ドクター・ウッドはこの頃東京にいて、トイスラーの出立の前日トイスラー私邸に見送りに来た渋沢栄一子爵のことを次のように書いています。

「私が最も大切にしている思い出の一つは、この二人の会合である。八十八になる老子爵が遠い所をわざわざトイスラー邸を訪ね、『あなたのミッションの成功を祈っているよ』と言うのを見て、人のため世のため働く人の前には国籍や人種また文化の違いも気にならなくなるということを感じた。」

1928年4月3日トイスラーはニューヨークに到着するやいなや聖公会信徒全米委員会の開催

を申し入れ、聖路加国際病院の建設資金として最低265万6千5百ドル募金の件を承認してもらいました。その後一週間も経たないうちにニューヨークにおいて別の会合が開かれ、同様の承認を取り付けました。数週の内に募金活動の中核となる人々が決まり、募金が本格的になりました。信徒委員会の会計主任のトーマス・ラモントもその一員となりました。会合に出席した人々の多くが早くも寄付を約束しました。

この募金活動の幸運な滑り出しに満足した彼は、休養をとるためノーバスコーシャに家族とともに出かけました。彼はこの美しく青い海、眩しく輝く太陽のノーバスコーシャで十分休養した後、9月初旬ニューヨークに帰りました。

理想家で、また強い実践家であった彼は、全世界をつなぐメヂカル・センター・チェーンな

る構想をニューヨークタイムスに発表しました(10月8日)。その案はニューヨークメヂカル・センター、ハーバード医科大学、メイヨークリニック等十数か所の米国大病院、北京医学校、東京の聖路加メヂカル・センター、その他ベルルート、シリア、ウイーン、ハイデルベルク、パリの米国病院、トロント大学等をつないで世界の人に奉仕しようとする大計画でした。

その年の10月12日、トイスラーはワシントンDCで開かれた米国聖公会総会で演説して喝采を博し、265万6千5百ドルの募金の承認を得ました。ここでもその主な額はその発起者側の負担でした。他の活動の妨げに配慮しながら彼の資金集めは精力的に進められました。特にミセス・ヘンリー・P・デビソン会長の教会に所属する女性陣は、この募金活動に関してめざましい働きをしました。

ロックフェラー財団は聖路加女子専門学校に40万ドルを出すことを約束してくれました。広くアメリカ全土にわたってキャンペーン活動は強力に推し進められました。ニューヨークを初めとし太平洋岸に至る迄沢山の町で、機会のあるごとに彼は病院の募金のための演説を行いました。個人的な会合のある場所でも募金の目的を話しました。たとえば彼になじみのあるリッチモンドに於いても、感謝祭の期間に開かれた小さい会合にも顔を出し、宣伝を怠りませんでした。しかし彼はこの間の激務について、東京帝国大学(今の東京大学)医学部長の長與又郎に「私はこの冬には日本に帰りたいと思う。病院建設に必要な資金が手に入った時は嬉しいが、その説明や手続きを細々と丁寧にやる仕事

は決して楽ではなく骨の折れる作業だ。」と書いています。また他の友人宛には、彼が長く本来の仕事(聖路加国際病院の医師としての意味)から離れていなければならないことを嘆いた手紙を出しています。

しかし彼を勇気づける事も数々ありました。その1つは東京において秩父宮殿下が東京米国人団体の夕食会に出席されて聖路加の過去の業績、日本社会への奉仕に感謝しその計画を支持するという趣旨の演説をされたという報道が日本から来たことでした。

米国でも多額の寄付を申し出る人は少なかったのですが、少額の寄付者は驚く程多くありました。

あるYMCAのウェイトレスは聖路加の話を聞いただけで15ドルを寄付しました。セントルイスのある病氣療養中の婦人は分割払の第1回として5ドルを送って来ました。これ等はその金額よりも人々の中に聖路加国際病院に対する関心と同情が広がっていることを意味し、トイスラーを喜ばせました。

1929年6月までに90万ドルが入金(あるいは入金の保証)されました。これは大きな額ではありませんが、それでも予定額の3分の1でした。しかし彼が日本へ帰ったあとも寄付は続き、募金活動によって集められた金額は3百万円(150万ドル)を超える額になったと評議員会で報告されました。これによって看護婦学校と入院患者病棟建設資金が確保され、さらにトイスラーのビジョンに賛同し、力になってくれる数人の友人を得たことは大きな功績と言わなければなりません。その筆頭は大富豪ジョン・D・ロッ

クフェラーであり、その他教会平信徒委員会の数人の人々でした。

募金活動は1929年7月1日に終了することになっており、トイスラーは東京に帰ることになりました。彼の家族はヨーロッパ経由で先に出発し、パリで彼を待っていました。トイスラーは6月28日、客船レビアザンで従姉妹のウッドロウ・ウィルソン夫人（第一次世界大戦時の米国大統領夫人、結婚前はエディス・ボリングといた）とともに出帆しました。ロンドンで下船して息子ルドルフ・B・トイスラー・Jr.に会い、それから聖ジョージ教会に行き祖先のポカホンタス（17世紀初期のジェームスタウン辺りに居たアメリカインディアンのポウハタン族酋長

の娘で英人ロルフと結婚した。ボリング家の祖先）の墓に参りました。永い間の募金活動で疲労困憊したトイスラーにとって東京に帰るこの旅は緊張から解放された特別に楽しいものとなりました。彼は乗船した榛名丸から、ドクター・ウッド宛の手紙に「船上での休息や海上で過ごす素晴らしい日々が骨休めとなった。私は楽しんでいる」と書いています。

ウィルソン夫人と以前約束をした北京を見て廻るため、北京に立ち寄り北京医学校の職員とも旧交を温めました。新病院計画に役立てる為多くの場所を見学し、また若い日本人医師の卒後研修についてもロックフェラー財団の人々と意見交換を行いました。

4. 新病院建設と公衆衛生事業の拡充への取り組み

帰京したトイスラーを最も喜ばせたのは6階建ての鉄骨の骨組と、壁となる部分にコンクリートが注入される光景でした。彼は永い間の募金活動で新病院建設の現場を離れ、指導を怠ったことを取り戻すため、即座に建設と運営上の仕事に取り掛かりました。

その中で彼が最重要視したのは、1928年病院の一独立部門にした公衆衛生部でした。この部門の事業をもっと拡大する必要がありました。当時の日本には公衆衛生事業やその思想が極めて稀薄でした。公衆衛生管理施設や家庭看護のあり方が無視されていた日本を見て、これを改善すべきと思い、1923年以来細々ながらその努

力をしてきました。震災直後、彼はロックフェラー財団から日本政府宛の手紙を託されて帰京していました。その手紙は日本政府が公衆衛生教育とその人材育成の施設を設立することについての提言と、その場合同財団が協力を惜しまないという趣旨のものでした。トイスラーは日本に帰って直ぐに内務大臣後藤新平に会ってこの手紙を渡しました。その後度々彼は内務省官吏にこの件について話しました。このことは両国の政府において困難な事情があり数か月に亘って解決しませんでした。遂にトイスラーはアメリカから公衆衛生看護婦、クリスティン・M・ヌノーを招き聖路加国際病院で働かせまし

た。また病院スタッフの一人、斎藤潔をロックフェラーのフェローシップを利用し公衆衛生の研究のため米国に派遣したのです。

1930年、内務大臣安達謙蔵は、公衆衛生施設は日本において緊急かつ重要な事項であることを、繰り返し公の場で表明しました。これに応じて、トイスラーの計らいで、安藤謙蔵、トイスラー、米国大使フォーブス、ロックフェラー財団のドクター・ヘイザー、ドクター・グラント等による会議が行われ、日本政府の任命する委員によってその会議の報告と計画がロックフェラー財団に提出され、2年後に同財団から100万ドルを拠出してもらうことになりました。ここにトイスラーが10年間にわたり努力し続けて来た公衆衛生事業の推進が現実となったのです。

トイスラーは公衆衛生事業を進めようとするその努力が実るのを待たずに死去しました。その3年後、政府は築地に東京市特別衛生地区保健館を建て、前述の斎藤潔を館長にして指導に当らせました。この保健館の館長は斎藤の後同じく米国で公衆衛生を学んだ人々が受け継ぎ管理運営に当たりました。(現 中央区保健所)

聖路加国際病院の公衆衛生部の仕事は保健館設立後も続き、病院スタッフによって立案された諸事業は益々その効果を発揮し、人々から一層深い信頼を得ることになりました。

聖路加の公衆衛生事業の1つとして、病院の医師、看護婦の指導の下に「聖路加ジュニア・ヘルス・リーグ」連盟が作られました。これはこの地区の青少年によって作られた自治的な団体で、地区の若者の病気予防と個人衛生を教え、推進することを目的とするものでした。また、

この他に婦人の若年層にも同様の団体が作られました。この会員数は1933年には2300人と記されています。この計画にはシカゴのW・リグレー・Jr.氏からの寄付金が贈られました。その頃米国の野球のメジャーリーグのチームが日本にきましたが（その中に本塁打王のベーブ・ルースもいました）、そのチームから日本少年健康教育のためにという名目で寄付がありました。

聖路加女子専門学校は日本社会、なかでも医師社会に影響を与えつつありました。同校の教務係代表安藤雅恵（日本語での交渉が難しい専門学校校長ミセス・セントジョンに代わって文部省の交渉には安藤が当たっていました）がトイスラーに出した手紙には「官立医学専門学校の会議に於いて看護教育の基準を引き上げ、看護の質向上に努めることが決議されましたが、その会議で聖路加女子専門学校、赤十字看護学校が話題に上り、トイスラーの看護標準に関する考え方が、これら出席した教授達に大きな影響を与えていることを喜んで報告します」と書いてありました。

病院の建築はトイスラーの思う通りに捗りませんでした。建築資材、殊に内装は米国からの輸入品が主として用いられたため、遅延するのは止むを得ませんでした。

病院本建設の定礎式（Corner Stone Ceremony）は1930年3月28日に無事行われました。丁度その日は東京市の大震災復興祝日でした。日本の名だたる人々、医学界はもとより科学者、政治家、大学代表者、米国および英国大使の参加があり、特に秩父宮、同妃殿下の御来臨がありました。両殿下はメヂカル・センターを参観

されました。

米国の聖公会代表のドクター・ウッドが定礎石を据えることになっていましたが、その場になってトイスラーに譲りました。二人は互いにこの役を譲り合い、遂にウッドが石を軽く打つセレモニーを行いました。その定礎石には日米両国語で次の銘が彫りつけてあります。

この日本文の銘は英文の銘と同義で、東京帝国大学教授文学博士姉崎正治が撰んだものでした。聖路加国際醫道院は聖路加インターナショナル・メヂカル・センターを姉崎先生が訳したものです。また公爵徳川家達は当時の貴族院議長で、徳川家最後の将軍徳川慶喜の跡を継ぐべき人でした。

病院の建設資金の不足はトイスラーの悩みの種でした。彼は意を決してマキム主教の同意を得て、女子専門学校と入院患者病室建設資金募集のため、再び渡米しました。1930年11月の事です。手ごたえはあるものの募金は思った程集まらず彼は失望していました。しかし幸いにも



St. Luke's International
Medical Center
Dedicated to the Glory of God
And the Service of Humanity.

神の栄光と
人類奉仕のため

聖路加国際醫道院
公爵 徳川 家達 書

定礎式のセレモニー会場

1931年2月に友人の紹介によって2口で75万ドルの寄付の申込を受取りました。これで建築中の2つのユニットの建築が保証され、彼は大いに満足して日本に帰りました。

5. 米国聖路加国際病院評議会

アメリカ滞在中彼はまたアメリカ実行委員会を「東京聖路加メヂカル・センター評議会」として恒久的な団体とすることを計画し、1926年に組織された聖路加募金の平信徒委員会会長ウィッカーシャムをこの計画の評議員会会長に（多少強引に）推しました。ウィッカーシャムは、始めは断っていましたが、トイスラーの事

業と、その人格に感銘してその後受諾しました。

1931年の夏、トイスラーは大西洋単独無着陸横断飛行で有名になったリンドバーグ大佐夫妻を招待しました。大佐は5日間トイスラー宅に滞在し、トイスラー家並びに日本側から厚いもてなしを受け、また病院を視察してその設立の趣旨と実行に大いに感銘を受けました。彼は米

国に帰り、聖路加国際病院を大いに推奨し、米国の聖路加国際病院評議員長になることを引き受けたのでした。

1931年7月に聖路加メヂカル・センターの米国評議員会はニューヨーク州法律により法人として認められました。

トイスラーは公衆衛生事業、病院本建築落成募金が一旦落ち着いて日本に帰り、病院の管理、特に新しく建築される本館のプランについて極めて熱心に細々と指示を与えました。つまり、どのようにすれば良い医療の提供と患者の快適な環境を作ることが出来るかを熟考し、時によっては出来上っている部分の設計を度々変更することもありました。このため、竣工迄に予想外の長い日時がかかりましたが、止むを得ませんでした。

1932年、米国聖公会で3年に一度開催される青年男女の誕生感謝献金の中から、3万5千ドルが聖路加メヂカル・センターの小児科病棟に寄付されました。トイスラーはその寄付金に対する感謝を表わすために小児科病棟は空気のよい日光のよくあたる最上階（6階）全部をあて、全床50ベッドと他に快復期児童用ベッドを屋上にも置きました。快適で十分な広さを持つ遊戯室、日光浴室、三方を窓で囲まれた中央大部屋からは富士山を眺めることが出来ました。トイスラーは「誕生感謝献金」の若者たちに彼らの意を汲んだ素晴らしい小児病棟を設置したことを手紙で伝えました。

彼は次に健康児健康管理が聖路加国際病院において開始された事を報告しています。

毎年病院で生まれる乳児は1,200から1,400人

でしたが、これらの子供はその後14年間は病院の管理下におかれ、特に最初の3年は病院において定期的な指導がなされ母親は育児法を教えられました。子供が就学前になるとクリニックで伝染病の予防についての教育を受けました。そして教育はその後の指導管理についても病院と文部省との人脈を通じて社会福祉機関・保健機関との連携によって続けられました。

1933年10月に聖路加国際病院は日本医学界で最も卓越した二人の医学者をスタッフに加えました。一人は東京帝国大学教授の塩田広重、もう一人は同じく同大学の教授の稲田龍吉で、二人ともこの年、同大学を定年退職し名誉教授となったので当院に招かれたのでした。トイスラーはこの日本医療界の最高峰を迎えることは病院の学問技術の進歩、診療の発展拡張に大いに役立つこととして非常に喜びました。1932年5月12日のフローレンス・ナイチンゲールの誕生日には、聖三一大聖堂において最初のナイチンゲールの記念式が盛大に行われました。2百数十人のユニフォーム姿の看護婦が聖路加国際病院、帝国大学、慶応義塾の諸病院から参集しました。

専門学校の建物が完成するとすぐに約束の通り、40万ドルがロックフェラー財団から贈られてきました。なおその前年にはジョン・D・ロックフェラーから35万ドル、震災で受けた被害を考慮して個人的に送って来ていました。この寄付によりトイスラーの金銭的負担は非常に軽くなりました。建築作業は進み1933年6月には開院する見通しがたちました。

彼はこの時インフルエンザと心臓病の症状に

悩まされ、養生をとるため帰国し夫人とともにカリフォルニアのサンタバーバラで数週間静養しました。元気を回復した彼は新築病院の開院奉献式に間にあうように日本に戻りました。予定の5棟の中、看護学校と入院患者用の2棟は

すでに竣工していましたが、外来診察棟（西側に予定の4階建てウエストウィング）と事務系管理棟等の建物のために集められた資金は、この時の世界情勢が原因でアメリカ委員会と聖公会全国協議会により保留とされました。

6. 病院の完成



1933年完成直前の新しい病院

出来上った病棟は病院のプランの中核をなす部分であり、6階建て高い塔が中央にありその上には十字架がかかっていた。その内部は廊下、階段、エレベーター等最新式で十分に広く取っており、病室は換気、日光等申し分なく配慮されていました。多くの見学者はここに入院したら退院するのがいやになるだろうと言ったほど心地よく考えられていました。この

建物は言葉通り「国際病院」と呼ぶにふさわしく、世界に通用する病院でした。患者へのサービスも病院の経営も診療に来る外国人も日本人も等しく満足が与えられる設備となっていました。日本側からも建築その他のために大分の補助金が出ていました。運営費は一年約50万円となりましたが、日本政府からは1万65円の補助金が出されることになりました。

以下は1933年6月4日に行われた新病院の開院奉献式の頃の状況です。まだ本館2階の廊下から北側に建設予定であった礼拝堂はコンクリートの床しかなく、奉献式の当日は床と天井に木の板を貼り、布で覆い松の木や蔓草をあしらひ美しく飾られました。臨時の祭壇は白地の布で装飾され、新館においての最初の礼拝はこの仮の礼拝堂で執り行われたのでした。当日午後3時から奉献式礼拝では、トイスラーの希望によりマキム主教が日本語で司式をしました。トイスラーは基本的にこの病院は日本人の為の病院であると考えていたので日本語を使用するよう進言したのでした。演説者は米国聖公会の大主教ジェームス・ディウルフ・ペリーと東京の松井主教の二人が行いました。このペリー大主教は徳川時代末期、黒船を率い日本に来て開国を迫ったペリー提督の孫（あるいは曾孫）であったと言います。日本側からは高松宮殿下の来臨があり高官も多く、外交団の人々、日本聖公会の聖職者、他教派会の人々も多数参列しました。勿論病院の医師、看護婦、上級職員達も皆式に参列しました。米国大使グループは、「新病院は一人の人ルドルフ・ボリング・トイスラーの信仰と偉大な精力の結果生れたものである」と演説しました。日本のキリスト教会委員W・B・アクスリンクの演説に続いてトイスラーは

謙遜に感動を以て「自分は日本で共に働く職員達のシンボルにすぎない。仮に我々の事業が幾分でも成功と言えるならそれは日本人スタッフの絶えない忠誠心があったからだ」と力説しました。

以上、私（中村徳吉）は関東大震災から新病院落成迄10年のトイスラーの献身的な努力について述べてきました。前述したように彼は公衆衛生の面にも至大な貢献をし、ウェル・ベビー・クリニック、ウェル・チルドレン・クリニックを実施して社会、そして、東京市および京橋区（現 中央区）の公衆衛生への関心を促したのです。

トイスラーの功績のうち特記すべきものの一つは、日本にこの公衆衛生事業を導入したことです。それは第二次大戦後、本格的に取り入れられる20年も前だったのです。日本における公衆衛生学専門家の養成に力を尽くし、彼の仲介によって、多くの若い学者が、ロックフェラーの奨学金を得て、米国で勉強しました。今日、日本の公衆衛生界で中核をなす人々は、その時の研究生です。野辺地篤郎（第5代院長）の父野辺地慶三、本院の小児科に居た斎藤潔（前国立公衆衛生院長）、その他沢山の人が同じ目的を持って米国で勉強しましたが、このことはトイスラーの大きな功績であると思うのです。

第10章 逝去



晩年のトイスラーと夫人・3女のミルドレッド

1930年11月に彼は自分の健康が衰えつつあることに気がきました。その冬、胸部をしめつける圧迫感と運動後の左上肢の痛みなど狭心症の主症状が出るようになり、友人達は彼の様子が普通でないことを見て非常に心配しました。中でもトイスラー事業の最大の助け手であったW・C・プロクター大佐は彼の健康を心配し、自分が寄付する50万ドルは、『トイスラーが仕事を離れて4カ月間完全に静養しなければ渡さない』という条件を寄付の申込書に書いて休養を強く勧めました。

この手紙はすぐ効果がありました。トイスラーはプロクターに手紙で「私がシンシナティ

であなたに会ってから私の募金活動は軽減し、安静に努めた結果、俄然体調が回復してきました」と書きました。(ドクター・ウッドが友人に書いたように) トイスラーは再び元気に若やいできた様に見えました。

しかし4か月間休息を取るというプロクターとの約束と、自分の休養期間中に病院の建設が遅滞するのではないかという葛藤のため、トイスラーの精神状態は休まることはありませんでした。プロクターはトイスラーの健康に対する約束を強く主張しました。トイスラーは東京に帰って来た息子とともに葉山で新しいボート(彼がプリンスと名づけたヨット)で海を楽し

みました。彼は東京からプロクターに「あなたとの約束に従って静養に努めています。子供とともに週の大半は小さいヨットに乗って楽しく遊んでいます。それでも病院には少し行っています。病院の仕事は遅れるが仕方ありません。お蔭で私は元気を取り戻し体重も4.5キロ増加しました」と伝えました。そして、彼自身の健康への努力と病院建築の進行、また公衆衛生部門を病院に統合させる計画を検討しているにつけ加えました。しかしトイスラーは熱心さのあまり来訪者に病院を案内する際、階段を上り下りすることを厭いませんでした。マキム主教は見るに見兼ねて自重するようにと書面で彼に進言しました。

1933年の9月14日トイスラー夫妻は三女ミルドレッドをつれて「浅間丸」で横浜を出発してアメリカに向かいました。彼等はロスアンジェルス近郊にある、山中のバーモントで暫く静養を取ることとなりました。次いでアリゾナ州のトクソンから125キロ程はなれた砂漠の中にある農地に移り、ここで日光の輝きとサボテンの美しさを楽しみながら3か月間を過ごしました。彼は徐々に健康を回復して来ました。農家の一部をスクリーンで仕切ってオフィスのようにしたスペースを作りペンを取り、友人、知人、病院等に手紙を書き始めました。また心臓疾患の人には禁忌の乗馬や、馬に乗ってポテトを拾うゲームにも加わりましたが、これは周囲の人の強い忠告によってやっと諦めました。

元来、彼は熱し易く気の短い性格でしたが、病気になってからは以前の彼とは比べ物にならない程柔和になり忍耐強くなりました。家族は

その変化に驚き、かえって気がかりに思う程でした。

トイスラーは病気が良くなるにつれてこの田舎の色々な生活や美しい景色にも退屈しはじめ、山や砂漠の静かさが耐え難いものとなりました。遂に一家はゆっくりと旅行を楽しみながら東京に戻ることにしました。

最初に行ったのはメキシコ太平洋岸のマザトランという市でした。気候温和で平和な町でした。彼は町の市場で農家の人々が果物、野菜、牛馬迄持ち込んで売買するのを見るのが楽しみでした。

そこには日本人が営む床屋がありました。彼は引き付けられるようにその中に入り、日本語で日本人風に挨拶すると床屋の主人は驚いてしまいました。日本から1万km以上も離れたこの町で、まさか日本語で、日本人らしい物腰で挨拶する人に会えるとは想像もできなかったからです。このようなことは、トイスラーにとっては初めてのことでありませんでした。かつて家族とともにニューヨークのイーストサイドを散歩した折、路地裏の日本食レストランに入ってみたり、またコニーアイランドでは日本人が開く骨董品の店に寄って日本語でおしゃべりを楽しんだこともありました。彼は冗談が好きで自分がその対象になっている事を、むしろ喜んで、面白がりました。

マザトランではトイスラーの愉快的な経験についてこんな話もあります。

このあたりにはテキーラというサボテンを蒸溜して作るアルコール度の強い飲料があり、他国人がその飲料を飲むと危険だと警告されてい

ます。ある日、昼食のあとで物好きにも彼は試す気になり、テキーラを取りよせ一口すすって樹の下ベンチに戻って座りました。ふと下を見るとベンチの下に巨大な蛇がとぐろを巻いていました。彼は恐ろしくなりました。近くにいたホテルの使用人の2人は落ちついて素知らぬ顔をしています。彼は立ち上って使用人に警告すると、これは彼が飲んだテキーラのための幻影ではなくて、飼い馴らした蛇なので害は無いと言うのを聞いて安心したということでした。

トイスラーはマザトランで快適な日々を過しました。3月の末か4月の初めにはニューヨークに行く予定でしたが、念のためサンタバーバラに行って心臓の診察を受けました。サンタバーバラの医師（複数）は、彼の心臓の状態は良好と診断しました。その後サンフランシスコに行って、日本行きの船を予約しておいて、ニューヨークの心臓専門医に診てもらうためそちらに向かいました。ニューヨークでは診察を受ける以外に全米聖公会委員会に出席し、聖路加国際病院の完成と協力を改めて求める雄弁な演説を行い、資格を持つ米国人医師と看護婦の派遣、そして新礼拝堂建設資金を求める要請を述べました。委員会は彼に嬉しい決議を行い、彼は極めて満足でした。

次に彼はリッチモンドに行きトイスラー夫人と合流し親戚も訪問しました。またリッチモンドではドクター・ウィリアム、T・サンガーからの手紙を受け取りました。T・サンガーは、トイスラーの母校である医学専門学校の校長でした。彼の手紙には次の卒業式の時、母校からトイスラーにドクター・オブ・サイエンスの名

誉学位が授与されることが書かれており、さらにトイスラーの極東での功績は本校の最も誇りとする所であると付記してありました。

一方、悪いニュースもありました。ニューヨークの心臓の専門医から、リッチモンドの主治医宛にトイスラーの心臓は「深刻な状態」であるとの連絡が入っていました。時々快復の兆候はあっても心臓の衰弱は快復不可能とありました。ニューヨークでの募金活動の過労が急性の気管支炎を引き起し、心臓にさらなる負担をかけていたのです。そのため、母校の卒業式には出席できず、学位は彼の不在のまま授与されました。5月17日サンフランシスコ出帆の乗船予約は取り消されました。

トイスラーは、最後の数日は愛する東京で過ごしたいという希望を持っていたと、リッチモンドの医師ダグラス・ワンダーフーフは言っています。トイスラーは死を覚悟していました。訪問に来た友人に、「私はいつ死ぬかわからない、しかしあと1〜2か月でも生命があったら東京へ帰って残されたわずかな日時を聖路加で過ごしたい」と言っていました。これは彼の感傷ばかりではなく、彼は聖路加の完成と発展のため、残ったごくわずかな日時もそれに献げなかったのです。

彼のこの願望はかなえられました。彼は東京に戻ってから聖路加の仕事に余力を尽くすことができたのです。彼はなお強靱な精神力で自身の悪化した健康状態を他人に悟られないように振る舞いました。

彼は太洋丸でサンフランシスコを出発し、7月11日に東京に戻りました。安静は乗船するま

では守っていましたが、船中ではまた活動的な本来の彼に戻りました。船が出帆するとすぐに彼がいなくなりました。家族が探すと女性客と英語が分からない日本人男性乗務員がデッキチェアで言い争っているのをトイスラーが通訳している所を発見しました。彼は船医と船客との対話にも仲介の労を取りました。

東京に戻り、挨拶で息をつくひまもなく彼は近所に住む病院スタッフの家を訪ねました。翌朝には病院に顔を出し、いつも通りに仕事を再開し溜まった仕事への指示を出しました。

7月中は東京にいて、秘書のミス・レードを伴い家族とともに葉山に移りました。東京に度々行くのを避けるために秘書が必要でした。

ミス・レードは言いました「彼は余命の少なくなっていることを承知して、残された時間を有効に使うとしていたのです」。

彼が最後に出勤した日は1934年の8月7日（火）でした。8月8日（水）橋本寛敏内科医長（第三代院長）が葉山に呼ばれました。病院に入院するのを嫌がるトイスラーを皆で説き伏せてやっと入院して貰ったのです。彼は自分の病気のために他人に迷惑がかかるのを好まなかったのです。

東京へ向かう移動中の自動車内でも彼は病院のプランについて熱く話し続けました。

その2日後、1934年8月10日、彼は聖路加国際病院において冠状動脈血栓症にて睡眠中に死去しました。彼の病院に関する最後の言葉は「Let the work go on」享年58歳でした。

彼の死後数時間、日本の主なるラジオ放送局は彼の死を放送し、外国報道員はそれぞれの国

に打電しました。米国国務卿長官コーデル・ハルも弔電を発し、彼の人道への奉仕を讃えました。

葬儀は仮の礼拝堂で厳粛にそして簡素に行われました。日本政府並びに外国から代表者の来弔があり、外務大臣広田弘毅や後藤文夫等も参列しました。遺体は茶毘に付され骨壺は新しいチャペルが完成するまで旧館の礼拝堂に安置されました。

3か月後の11月10日、新病院のホールで彼の記念追悼式が行われました。公爵徳川家達、外務大臣広田弘毅、阪谷芳郎、東京市長牛塚虎太郎、東京帝国大学教授長與又郎等が弔辞を読みました。米国大使ヨセフ・グルーも参列しました。

12月2日にニューヨークのセント・トーマス教会ではトイスラー記念礼拝式が行われ、大主教ジェームス・ペリー、日本大使斎藤博、ウィッカーシャムの演説がありました。

2年後、1936年12月13日聖路加の新礼拝堂奉獻式が行われました。この礼拝堂はトイスラーが病院の精神的中核として最も力を入れて設計建築したもので、この祭壇の下にトイスラーの遺骨が安置されています。

彼のハンサムな肖像が本館一階中央廊下のチャペル入り口正面に掲げられ、下にDoctor Rudolf Bolling Teusler, the founder と記してあります。



旧館Ⅰ階チャペル入り口の正面にあるトイスラーの肖像写真

むすび

トイスラーの伝記を顧みて、最も特記すべきは彼の日本における公衆衛生思想、並びにその事業の導入、聖路加メヂカル・センターの建設が挙げられます。

彼は24歳の若さで一人のミッション・ドクターとして日本に来日し、治療設備など殆ど整っていない環境において仕事を開始し、33年の努力によって上記した大業績を成し遂げました。これらのうち、どれを取り上げて見ても大変な難事業でした。それらの達成の原動力となったものは彼の強靱な意志でした。彼は同国人に対しても日本人に対しても常に強かったのです。克服不能と思われる物事に対しても非常にねばり強く、あきらめて放棄するようなことはありませんでした。これはアメリカにおける開拓者精神そのものでした。彼の体には開拓者の血が受け継がれていました。

もう一つ彼は祖先から貴いものを受けついでいました。それはキリスト教的な素養でした。彼のような強い性格の持ち主は一步誤れば無軌道な方向へと走る可能性があり、粗雑な行為をする危険性があります。しかし彼は一步も誤りませんでした。彼の心の中には常にキリスト教の愛が流れていたからです。若い頃友人と狩猟に行って狐を助けようとしたことや、故国で安易な医業を営むことを捨てて、未開国とみなされていた日本社会へ飛び込んだこともこの愛の底流の現れでした。彼の多くの事業のどの一部分を取り出してみても、有形無形の自分への利益を求めるものは少しも見当りません。すべて心の愛と人道の表れと見る事ができるのです。このように彼の成し遂げた事業は崇高であり、光り輝いています。そして彼はこの賛辞に価する人なのです。

彼の事業の大部分は、今は人の意識から消えています。ただ壮麗な聖路加国際病院のみが毅然として建ち誇っています。

聖路加国際病院こそトイスラーの遺志、人道愛と日米親善を最も具体的に永遠に伝えるものなのです。

著者紹介



中村 徳吉

1886（明治19）年1月1日鳥取県米子に生まれる。1911（明治44）年12月に東京帝国大学医学部を卒業する。1914（大正3）年12月聖路加国際病院勤務。1922（大正11）年5月渡米し、ミネソタ州ロチェスター市メイヨークリニックに留学。1923（大正12）年10月帰国、直ちに聖路加国際病院外科勤務。1924（大正13）年12月、医学博士の学位を取得。1923（大正12）年10月以降聖路加に勤務し、外科医長、医務参与を歴任。1949（昭和24）年外科診療顧問。1974（昭和49）年10月11日逝去。

改訂にあたって

この「トイスラー小伝」は1968（昭和43）2月11日に初版が発行されています。これは1966年7月25日から1968年3月25日にかけて聖路加広報誌「明るい窓」に中村徳吉先生が寄稿された20回のお話を1冊に取りまとめたものです。

ベースになったのはアメリカで発行されたトイスラーの伝記

「Dr. Rudolf Bolling Teusler AN ADVENTURE IN CHRISTIANITY」であり、目次の項目などは英語版伝記とほぼ同じとなっています。しかし、内容においては米国赤十字シベリア救護班に実際に参加された中村先生の経験上の話や、トイスラー医師や周りの人々の日常を間近で見た感想など独自の表現も加えられており、英語版伝記だけでは知り得なかった本学の史実も記されています。

「トイスラー小伝」は創設者トイスラー医師の熱い志と聖路加国際病院の日本におけるパイオニア的働きの歴史を知る上で非常に有益な書物とされ、長年にわたり全ての新規採用者に人事課から配布されていました。初版発行以後幾度にもわたり増刷が行われましたが、内容や文章の表現は中村先生の記述を尊重し手が加えられないまままで今日までできました。

この度、管理を大学史編纂・資料室で行うこととなり改めて文章内容に目を通したところ「古い漢字熟語」「古い表現」などが非常に多く、このままでは今の職員には受け入れられないのではないということから文章表現を見直し、出来るだけ読みやすく修正するという作業を行いました。

さらに、最近判明した米国赤十字社シベリア救護班に関連した「難民児童800人救済のためトイスラーがチャーターした『陽明丸』」のエピソードや「チェコの傷病兵士100人を聖路加敷地内に移送して治療したことを示す写真」などを追補の形で、また元の冊子にはなかった当時の写真を随所に入れました。全体的には中村先生の「思い」を損なわないように留意したつもりです。

尚、中村先生がこのトイスラー小伝を書かれた頃から時が流れ、当時の病院本館は病院旧館となり、東側にあった看護大学は西側に移り、木造旧館が有った場所に現在の病院が建つなど建物の位置が大きく変わっています。中村先生の表現はなるべくそのままにしてその後に（括弧内に現在の位置的）説明を加えました。

この「トイスラー小伝」が、聖路加国際大学の歴史を知る上で将来にわたり職員のよき手引書となる事を祈念いたしております。

2019年（令和元）10月31日

大学史編纂・資料室

文責：渡部 尚子 薮 純夫



トイスラーの不屈の精神を表すとも言えるPhoenixのレリーフ

聖路加国際病院創設者
ルドルフ・ボリング・トイスラー小伝

	昭和43年2月11日	発行
	昭和58年4月11日	改訂増刷
	昭和60年9月1日	改訂増刷
	平成2年10月20日	改訂増刷
	令和2年6月30日	改訂
著者	中村徳吉	
発行者	聖路加国際大学大学史編纂・資料室	
印刷	勝美印刷株式会社	